
かささぎの梯

いづな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かささぎの梯

【Nコード】

N4429Q

【作者名】

いづな

【あらすじ】

「首都が壊滅したら首謀者を殺せ」国を出る前日、イナギは念をかけられた。

現在の寿命は10年間。目標は生き延びること。

最期に泣き言は真つ平御免、そのために彼は頭を下げる。

「どうか自分を弟子にして下さいッ」

（本作はArcadia様にも投稿しています。）

第一話 『弟子入り志願』

ブルルル、ブルルル、ブルルル——ピッ。

『夜分遅く失礼します。ヘニストさんはいらっしゃいますか？』

「——いいえ、ヘニストは留守にしています。急用ですか？」

『結構急ぎです。伝言、お願いしてもよろしいでしょうか？』

「ええ、構いません。……どうぞ」

『“君宛の届き物が何故か俺の所に来た。家まで受け取りに来て欲しい”——以上です』

「分かりました。時間と場所はどしでしょうか？」

『可能な限り早く。場所はフェアリーランドで』

「繰り返します。……“可能な限り早く。場所はフェアリーランドで”ですね？」

『そうです。よろしくお願いします』

「いいいえ、気になさらないでください」

『それでは、失礼します』

「ご丁寧にも」

ガチャッ——プー、プー、プー、プー……ピッ。

ピンク色の丸みを帯びたケータイ電話の通話を切り、少女は流れるような動作で懐へと仕舞い込んだ。

身につけたヒラヒラなドレスと後ろで一つに縛ったフワフワな金髪が、北から吹いてくる静かな風に揺れる。その姿はどこからどう見ても10代の前半にしか見えないが、その立ち振る舞いの動作一つ一つから窺われるのは鍛え抜かれた強さの片鱗。

「——さて、一体誰でしょうね。こんな古びた連絡方法を取る奴は」

そもそもこの連絡方法を知っている人間自体既に1桁にまで減っている。その中で連絡を取りそうな輩は——生憎と思い当たらなかった。

「厄介ごとにならなければいいけど……いや、もうなつてたわね」

さてどうしようかしらと考えながら、少女はクルリと振り返った。

……樹を隠すには森の中とはよく言うけれど、本当に良い樹は鬱蒼と生い茂る森の中でも目立つものだ。そして彼女の眼の前で根を張っているその樹は、間違いなくその類だった。

漆黒の空の下。煌く星達に見守られ。満月が注ぐ澄んだ光りを一身に浴びるその姿は、正に自然の芸術だった。幹から枝、そして葉の一枚一枚に至るまで全てにおいて完成していて、いつそ神々しいと形容するのがしっくりくる程。——その根元が一部ボコリと膨れ上がり、ドクンドクンと鼓動している。

——グイグイ・ツリー。子どもを産む樹。

人里離れた人外魔境の地にのみ根付くその樹の幼子を採用する事が、今回の少女の仕事であった。

「成功報酬は惜しいけど、向こうの方が優先順位高いからね……仕方がない。ここは素直に諦めましょうか」

名残惜しそくに、本当に名残惜しそくにその樹を一瞥してから少女は踵を返した。

……振り返らずに歩いていく。段々とペースを上げていく——。

「それにしても、誰だか知らないけど、つまらない用事だったらタダじゃ済まさないわさ」

最後にそう呟いて、少女はその森を後にした。

——その森に新しい生命が姿を現したのは、それから僅か1時間後の事だった。

かささぎの梯

第一話 『弟子入り志願』

近くの街から車で3時間ほど走った所に、その小さな森があった。

交通の整備は最低限しかされておらず、周囲に人家は1軒もなく人影も2つを除いて見当たらない。幸か不幸か、必然か偶然か。近年各地で行われている大量開発から逃れた相当稀有なその土地は、まさに自然の宝庫だった。

辺りには様々な種類の木々が大量に群生し、必然的にそこを住处とする野生動物が大量にいる。目の前を流れる小さな川にも様々な種類の魚がいて、それらの姿がハッキリと知覚できる程川の流れは透き通っていた。

ここでは人間が闖入者だ。至る所に様々な動物がいて、その澄んだ視線が心地よい。

時は夕刻。帰途に着く多くの鳥が頭上を気持ち良さそうに舞っている。

遙か遠くには沈みかけている太陽。それと同時に月が昇りかけていて、空という舞台で1日も休むことなく開幕されている壮大な劇の幕間。

その最中。太陽の姿を映し真っ赤に染まる川の辺で、イナギは深々と頭を下げた。

「どうか自分を弟子にして下さい」

「そうねえ。修行期間にもよるけど、最低50億ゼニーだわさね」

「……そんな大金を持つてるとでも？」

丈夫な白い長袖に動きやすそうなジーンズ、少しくたびれている灰色のジャケットというのがイナギの出立ちであった。そこにボストンバッグとその中身を加えた物が、現在彼の所有している全てである。

金持ちに見える要素は欠片もなく、そして外見はイナギの懷事情を如実に示している。そもそも50億なんて大金を持つていれば、出国する際に貨物船の荷物に紛れるなどという方法を取る筈がなかった。

「ん……うん。財布の中身はとても軽そうね」

対する少女は、イナギの全身をじっくり観察してから朗らかな笑顔で答えを出した。何気に失礼だが、正解であるため文句は言えない。ちなみに不正解だったとしても文句は言えない。

「じゃあ、そういう事で万事解決。またいつか会いましょう」
「つてもうちよつと話を」

聞いてくれても……と、イナギは少女へと手を伸ばす。フリルの付いたスカートをなびかせながら立ち去ろうとしている背中に一歩近づき、その小さな手をがっしり掴んだ。

が、普通に振り払われた。何事もなかったように去っていく少女。

薄く痺れる右手に少時驚くも直ぐ様我に返り、さらに走り寄り掴もうとする――が、今度は触れる事すら出来なかった。まるで後

るにも眼があるみたいに、イナギの手をサツと避ける。

……少々、ムツとした。

再び掴みにいく。しつかり掴む。――振り払われる。

即座に掴み取る。力を入れる。――振り払われる。

好機を見計らう。掴み取る。――振り払われる。

掴む。離れる。掴む。離れる。掴む。躓き引きずられる――。

「何よ、まだ何か用があるっていうの？」

「もう、ちよつと、早く、止まれよ……」

「……アンタが手を放せば済む問題でしょうが。どうして私がアンタの都合に付き合わなきゃならないのよさ」

そのまま地面を引つ張られること約15m。余りのしつこさと鬱陶しさに少女は立ち止まり、非常に迷惑そうに足元を睨みつけた。……その先には、まるでボロ雑巾のような物体が一つ。自身の頑固さと少女の容赦のなさが織り成した結果である。

「ふん、まあいいわ。兎に角これ以上ふざけるのは止めなさい……弟子入り志願なんて今時流行りじゃないでしょ。聞いてあげるからさっさと本題に入りなさいよ」

――それに、私の方からもいろいろと言いたい事が……恨みとか辛みとか怒りとかいろいろあんのよ。

そんな言葉と同時に吹き出た殺気は直ぐに消えたけれど、事の重大さ――恨みとか辛みとか怒りとかの大きさを理解させられたイナギはコクコクと頷いた。というか思い当たる節が無い故にそれしか出来ない。

「それで、話ってなんなのよ」

「どうか弟子にして下さい」

「……もしかして喧嘩売ってんの？」

断じてそんな事はない。流行だかなんだか知らないが、用件はそれだけである。

むしろこの状況を省みるに喧嘩売られてるのは俺の方ではないだろうか。土まみれになった自身の格好を省みて、イナギは深く溜息を吐いた。無論、心の中で。

「……」

「——で？」

が、物凄く睨まれている。上から見下ろしてくる彼女の視線が物凄く痛い。それどころか右手が物理的に突き刺されたように痛む……イナギの手の甲が物凄く踏まれていた。

「結構痛いんですが」

「——で？」

グリグリと挟り込む様に踏まれた手の甲が地面に埋まっていく……ってホント痛いなコレ。

さすがにここまでされて穏便な話し合いという訳にも行かないというか行かせるかというか、兎にも角にもイナギはいろいろと考えを改めた。どこの世界でも、舐められたら終わりであるのは変わらないのだから。

スツと、ごくごく自然な動作で踏まれていない左手を動かす。最短距離で彼女の足首に触れ——そのまま全力で振り抜いた。

不完全な体勢だが、そこは体格の差。少女の片足が地面を離れ、体が揺らぐ。同時にイナギは両手を地に突きその反動で一気に起き上がり、その勢いを利用して瞬時に体勢を整えて——

「へえ、なかなか使えるんじゃないの」

気がついたら、イナギは宙を舞っていた。……何が起こったのか
まるで理解出来なかった。辛うじて受身は取ったが、それだけだ。

「よつと」

地面に投げ出されたイナギの上に少女がゆっくりと腰を下ろす。
それだけでまったく身動きできなくなる。

愕然としているイナギの首筋に、細く小さな手が添えられた。

「さて、と。それじゃ質問変えるわよ。アンタはこの連絡方法をど
この誰から教えられたのか。……心して、答えなさい」

——嘘ついたら、この首もぐから。

その細い腕のどこから来るのか。ギリと力を込められたその手
には、人を簡単に殺せるだけの力が籠っているのが分かった。……
そして、イナギはその事実にあ堵した。

——師事する相手は、自分より強くなければ話にならない。そ
して目の前の少女が有する實力は、自分の遙か上をいく。

「宝石ハンター、ビスケツト「クルーガー」。間違い、ないか？」

「そうだけど。……何よ、アンタ私の顔知らなかったの？ 師事し
ようとする相手の顔も知らないなんてなんてないわね」

ま、潔く諦めなさい。心持ち肩をすくめながら話しかける少女
に、イナギは不敵な笑みを浮かべた。

「知ってた、さ。けど、実際に見ると、奇妙な感じだ……これじゃ
あ、誰も、50過ぎだなんて思わな——グッ」

グギリと力がさらに増した。容赦ない締め付けに氣道が閉まり、途切れ途切れの軽口が完全に止まる。

「……誰からその事を聞いたか、答えなさい」

「——グツ、ガフツ、ガハツ……」

「答えなさい」

感情が抜け落ちた絶対零度の声音。初めて感じたこれほどまでに強大な殺気。生死を握られた生粹の恐怖。背中越しに感じられるそれらに震えながらも、イナギははつきりとした声でそれに答えた。

「……アラマ＝ロード」

「——アラマ、師匠？」

「そう、だ」

その声から微かに呆然としたような響きを感じた気がしたが、表情を見る事が出来ないイナギにはその真偽を確かめる術はない。

スツと首元の力が緩められる。殺気は余計に大きくなった。

「嘔吐していたら承知しないわよ」

「……吐けるかこんな状況で」

そこに含まれた真実の匂いを嗅ぎ取って、ビスケはとりあえずその背中から降りる。同時に殺気もある程度霧散させるが、当然警戒は解かない。

ゆっくりと後ろに下がり、3歩の位置で静かに止まる。そこがビスケの最も得意な間合いだった。

イナギもゆっくりと立ち上がり体の状態を確かめる。……締め方が上手だったのか首への影響は全くない。手も皮膚は裂けていた

が、骨まで達してはいない。

確認し終えたイナギは、無抵抗の意思を表す為に改めてその場に座り込んだ。

「それで、師匠との関係は？」

「師匠と弟子」

「――ま、確かにさっきの動きの中に師匠の癖が見え隠れしてたわね」

それは真実だ。指南して貰えば、動きの中に少なからず指導者の癖が組み込まれるのはいわば必然である。

「他人の癖を意図的に真似る事が出来ない訳ではないけども――分かったわ、それは信じてあげましょう」

「……それはよかった」

チラリと向けられた瞳に宿る幼子を見るような光。信用してもらえたのは素直にありがたいのだが、理由が理由なのでいろいろと複雑な気分だ。

「それで師匠の弟子が私に何の用なの？」

「だから、師事させて欲しい。アラマ爺にいざって時はそうしろと言われて、連絡方法も爺から聞いた」

かなり古いものだが、多分通じるだろうなんて笑いながらだが、しかしそれ以外に当てが全くなかったので、繋がったのが分かった時には小躍りしそうになったりもした。

……それが昨日の事だ。それからまだ丸一日も経過していないけれど、イナギには数ヶ月も前の事のように思われた。

「確かに師匠ならこの連絡方法を知ってるわね、決めたの30年以上前だけど——それよりも言われたって事は、やっぱり生きてたのね、あのはた迷惑なお師匠様は」

そこに含まれている感情は、その科白とは正反対な親愛の情。その物言いにイナギは少々疑問を覚えたが、かなり昔爺に聞いた話を思い出して納得した。

爺は昔——それこそイナギの母親がまだ子どもだった頃に、死に場所を求めるとか何とかだけ書き残して姿を消したらしい。その後世界中を放浪し、何となくライラへやって来て何となく定住する事になったとか言っていた。

それが何の因果かまだ生きとるわいなんて呟いて、突然祝い酒を始めようとした爺を殴ろうとしたのも今となってはひどく懐かしい。

しかし、一応確認してみた。

「爺がどこにいたか知ってるか？」

「あの師匠が態々教えてくれたと思うの？」

笑顔が妙に怖かった。ああ、やっぱり教えて貰ってなかったんだな。何でも言わずに出てくるかな、あの突発的な思い付きを本気で実行する馬鹿爺は。

だからか。

「……ライラだ。爺はずっとライラにいた」

一先ず結論に至った所で、イナギは兎に角話を先に進める事にした。

「ライラって言うと、あの“氷に閉ざされた国”？」

「そう、そのライラ。俺が生まれるより前に来たらしいな」

「ちなみにアンタ何歳？」

「14だ」

ちなみに数えのである。

「それよりも、だ。昨日の事件について知ってる事を教えて欲し」

「ん？ 昨日の事件って何さ？」

「いや、何さって……」

まじまじとビスケを見つめるイナギ。けれど眼がマジだったの
で、ああだったら聞き間違いかと耳に手を当ててみるも特に異変は
感じない。

言葉が止まり、空気も凍る。出会ってから数分。始めて場に完
全な沈黙が訪れるが、ビスケはその空気に気づかない。

「だから昨日の事件って何なのよさ」

「——ちよつと待て。落ち着け俺。そうだよな、ある訳ないよな、
まさかハンターが知らないなんてそんな事」

「だから、何をさ」

家路を急ぐ一羽のカラスの鳴き声が妙に大きく聞こえる。再び
強く耳を引っ張ってみるも、ドップラー効果による妙に生々しいカ
アカア言う鳴き声の余韻がはつきりと認識できた。加えて痛い。

——ああ、聞き間違いではないらしく、ついでに白昼夢の類で
もないと。

「さて、それじゃあ帰るか」

「仕方がないじゃないのよ！ ここのヶ月は仕事でずっと山奥に籠
ってたのよ！ あとちよつとで依頼達成って所に緊急の連絡が入っ

て、依頼を途中ですっぱかして全速力でここに来たんだから！！」

飛行機チャーターするのにいくらかったと思ってんのよ！

と叫ぶビスケに確かに悪い事をしたなと思うが、それだけだ。それ以上にイナギはビスケに対して不安を覚える……だってこの事件（詳しい内容は兎も角、事件の存在）は一般人すら知っているのだから。ハンターという職業に羨望やら憧れを少なからず持っていた身としては、ひどく悲しい物があつた。

ちよいちよいとビスケ手招きして、持っていた黒色のポストンバッグから取り出したるは適当に買った今日の夕刊3誌。その一面にでかでかと記されているのは、壊滅的な打撃を受けたという島国・ライラの首都フランシールに関する報道である。

それらを差し出されたビスケはむっとりとした顔で、けれど素直に受け取って立ったまま読み始めた。

——数分経つて。一通り読み終えたビスケはパタパタと器用に新聞を折りたたんで、ポイツと脇に投げ捨てる。額の汗を拭う動作をしながら、ふうと軽い溜息を吐いた。

「……で？」

「これと、師匠の関係とか、詳しく」

「さて、それじゃあ帰るか」

「あ、繰り返しても面白くないから」

現実逃避くらいさせてくれよ！　かなり形振り構っていないイナギの懇願に気づくことなく、ビスケはその表情をフツと真剣な物へと変えた。

「そうねえ、めくれば——というかハンター専用サイトで調べればある程度詳しい事は直ぐにでも分かるわよ」

「だつたら——」

期待と興奮で思わず身を乗り出したイナギを、ビスケは静かに片手で制す。

「それはいつでも出来るわよ。——けど、今はそれ以上に今は重要な事があるわよさ」

「……何だ？」

その問いの先にあつたのは、先ほどまでとはまるで違うハンタの顔。

「それはね、アナタの話を聞く事よ——話して頂戴。一体そこで何があつたのか、どうしてアナタはここにいいのか。知っている事を、全て……」

——心は熱く、ひたすら熱く。されど頭は冷静に。

恐ろしいほど強い意志と大きな知性を孕んだ双眸に見つめられ、自然と浮かんできたアラマ爺の言葉をイナギは振り払う。そして事のあらましを始めから話すべく、傍らにあつた大きな石にどかっと腰を下ろした。真剣な面持ちで話を聞くビスケの顔を視界の端で確認してから、ゆっくりと眼を閉じ意識を過去へと向ける。

後から思えば……きつと、この瞬間にイナギははっきりと理解したのだ。

——彼女は師事するのに相応しい人物である、と。

▲

「アラマ爺は食客だった。そのくせ国の政治を行つ際には常に王の側に控えていて、さらに王族しか出られない筈の宴の席にも同席していた。その宴で初めて爺を見たんだが、あんな人間がいるのかと

かいろんな意味で驚いた。酒に酔っ払って王を蹴飛ばして、啞然とする周りを置いて王と二人で陽気に笑いあつて……」

イナギの脳裏にまるで水泡の様に沸々と浮かんでくるのは、作られていないたくさんの笑み。自分が尊敬していた人とその友人が笑い合う自然な笑顔。

「やっぱり変わらないわね、師匠は」

「ああ。変わらないな、爺は」

——うん。本当に、変わらない。

イナギとビスケはほんわかとした暖かい思い出の中へと入り込み、ぬるま湯のように心地よい陽だまりの中でホンワカとしていた。そうして快い思考の波に暫く浸つて……

「——って王族しか？ アンタもしかしてライラの王族なの！？」

我に返ったビスケの叫びでパチンと弾けた。

「……一応、な」

惘然とした表情でイナギは返した。回想を止められたという事以上に、純粹にその質問の内容に対しての不快感による物だ。勿論、その程度で引くビスケではなかったが。

「一応？」

「王位継承権がぶつちぎりで最下位」

あー……と、同情的な声と視線とが送られてくる。何となく馬鹿にされている気がしないでもなかったが、イナギはそれを思いや

りと受け取ることにした。

「いい事なんて数えるほどしかないのに、そのくせ悪いことなら数えられないくらいある。王位継承権を巡った抗争に巻き込まれるどころかモロ狙われるし、しかも遊び半分だし、それでいて護衛をつける金なんかなかったし、実際殺されかけた事は片手の指じゃやかないし。……そこで母親がアラマ爺に頼み込んで、結果幼い子供が1人鍛えられる運びになった」

「師匠がそれでオーケーしたの？ あの人押しかけの弟子志願大ッ嫌いだったんだけど」

「熱意に負けたりしないな。お前には勿体無い母親だと何度言われた事か」

しかしその母親はもういない。3年前に病気で逝った。その恩を全然返せなかった事を、きっと俺は死ぬまで後悔し続けるんだろうなとか思ってみたり。

……返すことの出来ない恩は本当に重いものだ。もしかしたら、ビスケはこの思いを何十年も味わってきたのかもしれない。

「で、他の王族連中がここぞとばかりに教えを請うたんだ。けど爺が事の如く断って……それを恨んだ連中が送り込んできた暗殺者には8割くらい殺されかけた」

川が見えたんだなんて遠い眼をして感慨深げに頷くイナギに、ビスケは同情的な表情をさらに深めた。

付け焼刃でない力を上げる為には死線を潜り抜けるのが最上である。それは確かだけれど、殺されない為に師事した事が原因で殺されかけたなんて本末転倒だ。そして何よりアラマ師匠はそれを見越していた気がしてならない。……というか、私の知ってる師匠なら絶対わざとだ。間違いない。

ビスケの頭にアラマ師匠との特訓の日々が蘇ってくる。当時は軽く……いや結構……大分……まあ、恨みもしたものだ。具体的には本気で闇討ちする程度。今となつては懐かしいばかりだが、今でも納得はしていない。

「王族で良かった事なんて、たまに食べられる美味しい食事とセレナと遊べた事くらいだったな。——そっぴやライラ王族の特異性について知ってるか？」

当然知ってるだろ？ なんて調子で問いかけてみるも——やっぱり返事は返ってこなかった。イナギの中で先程上がりかけたハンターに対するイメージだが、再び下方修正がかかっている。

「……何があつたか知らないけどな、ライラの王族は念能力者の自然発現率が高いんだ」

イナギのジトツとした視線から眼を逸らしていたビスケだが、その内容に興味深そうな表情を浮かべた。

「へえ、便利だね」

「そうでもないけどな、修行なんて真つ平御免な奴が多いし。中には熱心に研鑽を積む物好きもいるけど」

「アンタみたいな奴の事ね」

「戻すぞ。……それで今から大体半年くらい前、王族の一人が何やら妙なお告げを受けた。曰く“月が6度巡りゆき、7度目の満月の夜。我が国の首都に真の恐怖が具現する”。それを聞いた面々が“そんなもの返り討ちにしてくれる！”なんていきり立って、国が総力を挙げて戦争の準備だ。そうして」

「そうして当日を迎えて、予言どおりに首都は壊滅した、と。——アラマ師匠が何の手も打たないはずは無いと思うんだけど」

何かを考えるようにして続けたビスケの疑問に対して、イナギは特に深い疑問を覚えずに返す。

「確か1度だけ王にその日は首都を離れるように進言したみたいだが、重臣の大反発にあつてそれ以降は何も言わなかったそうだ」

……その言葉にビスケは思い悩んだ。彼女の知っている師匠はどんなに悪い相手でも足掻いて足掻いて最後には勝ちを奪い取る、そんな人だったからだ。

——その神官の念の精度を理解していたのか、師匠の手に余るほどの敵が相手だったのか、他にやるべき事があったのか、単に老いた結果なのか……。けれど、どれにしたって師匠がまったく動かないのはおかしいわさ。

とてつもなく大きな違和感。ビスケの思考を他所に、話は進む。

「結果事件の1週間程前に、題目は「いざ」という時に王族の血を途絶えさせない為」、本音は「体のいい厄介払い」でどさくさに紛れて国外追放させられた俺は生き残り、アラマ爺に教えられた連絡方法でコンタクトをとって、今に至る。——これが俺の知ってる事件の全てだ」



……全てを話し終えたイナギは、石に座ったまま無言でビスケツト「クルーガー」の言葉を待つ。

暫くの間腕を組んでひたすら何かを考えていた彼女は、3分ほど経ってから顔を上げた。

「それで、結局アンタは何がしたいのさ？」

「力が欲しい、生き延びる為の」

「まるで死期が分かっているような言い方ね……いや、むしろ定められている？」

即答に返ってきたのは、そんな訝しげな声。ビスケの表情も声音と同じく分からないという顔をしている。……が、その直感は正しい。とても正しかった。

「……念を、かけられたんだ。もし首都が壊滅したらその首謀者を殺さなければならない。さもなくば俺が死ぬっていう念を」

かなり小さかったが、イナギの耳は息を呑む驚きの音を捕らえた。その主であるビスケは、最悪のケースを予想し、尋ねる。

「もしかして、かけた人が死んでしまった……？」

「頭が固くて真っ先に突っ込んでいきそうな人だったからな。連絡がつかないから確かとは言い難いが、惨状の報告を見るには恐らく死んでるだろう」

「……ご愁傷様としか言い様がないわね」

まったくその通りだった。悲し過ぎて笑うしかなくて、当事者にしてみればある意味喜劇である。笑いしかなくて、救いがない。

……いや、一応救いはあった。

「地獄の中の仏だが、その念能力は能力者が死んでも条件さえ満たせば解除は出来る……らしい」

逆に除念で解除するのはかなり難しいようだ。朦朧とする意識の中で聞いた自慢げな声と黒い笑みを思い出し、イナギは少しだけ落ち込んだ。薬で眠らされている間に仕掛けられるなんてベタすぎ

る。や、だからといって奇抜な方法だったら落ち込まないのかと言われれば勿論そんな事はないのだが。

「……不幸中の幸いな。それで、襲撃者についての情報はあんの？」

「」

「ないな。まったくのゼロだ」

それが知りたくてここに来たというのもあるんだが、などというセリフは心に鍵をかけてしつかりと閉まっておいた。

「そして、期間は10年間」

「10年？」

「そう、それが現時点での俺の絶対的な寿命。事件の首謀者殺せば終わり。それ以外に、実行者の1割が死ぬ度に5年寿命が延びるシステム」

首謀者だけは自身の手で殺さなければならないが、実行者はその限りではない……本当に上手い調整だ。実行者の寿命を待っていたなら被念者は恐らく死に、だからこそ首謀者を殺す為に動かなければいけない。微妙に甘いさじ加減で望みがあるからこそ、生きる事に全力を尽くさざる負えなくなる。

——とても気に入らない話だが、全力で死者の掌で踊ってやる。俺の生死は俺だけの物だ。

最期に泣き言を言う人生だけは、真っ平御免だったのだ。

▲

「——その為に私に師事したいと」

「ああ。直接手を下さなければ解除されないみたいだからな。なるべく早く、可能な限りの強さが欲しい。そう、全ては——生き延び

る為に」

……その言葉を額面どおり受け取っていたなら、面と向かわず手紙や電話でコンタクトしていたなら、私は恐らくその申し出を蹴っただろう。

字面じゃ感情なんて出るわけがないし、眼の前で私をシカと見つめているコイツは、意図しているのかいないのかは知らないが声にも感情をほとんど出さないからだ。それは顔についても同じで、もしかしたら生き延びる為に必要な事だったのかもしれない。

……けれど、猫目色をした彼の目は何よりも多くの事を語っていた。目は口ほどに物を言うとはよく言うが、コイツは大切な事、重要な事を目でひたすら訴えかけてくるのだ。

半透明で蜂蜜のような色をした目を少し覗けば、そこには固い決意と慈愛——誰かを気にかける感情で溢れているのが見て取れた。それが彼の母親なのか、アラマ師匠か、はたまたセレナというお姫様か、それとも別の誰かなのかは分からない。

分からないが、彼の思いだけは本物だ。伊達に長い事生きていく訳じゃない私にはその事が分かった。……いや、分かっただけで済んだ。

そもそも待ちに待った、願いに願った師匠の頼みだ。

行方不明になって、死ぬ筈がないと信じつつも彼の死を心のどこかで受け入れた時の思い。——恩を返せなかったという後悔は、この30年間いつも私について回っていた。

そんな師匠がやっと私を頼ってくれたのだ。多分これが最後のチャンスだろう。ここで断ろうというなら、これから先ずっと後悔し続けるのは目に見えている。

その上コイツの目を見て納得もした。少なくともその意思は気に入った。受け入れるのに障害は何もない。

「分かったわさ。他ならぬ師匠の頼みだし、特別に修行をつけてあ

げる」

「……感謝する」

少し間を空けてから、お礼を言いつつ頭を下げる我が弟子。

……そうそう、弟子になるのならやはり聞いておかなければなるまいて。

「それで、アンタの名前はなんていうの？」

「——イナギ。イナギ〓セラードだ」

イナギ〓セラード。……うん、なかなかいい名前じゃないの。

「……それでイナギ、アンタは誰を助けたいのよさ？ お母さん？

アラマ師匠？ それとも——セレナちゃん？」

心の内を当てられたからだろう。イナギは私の言葉に驚いたような顔をしていたが、最後の名前を聞いた途端、顔が茹蛸のように真っ赤に染まった。必死に口をパクパクさせているが、そこからは何も出てこない。

私はゆっくりと上を向き、紅色に染まる空を見上げた。

その顔に浮かぶのは恐らく喜びの色。8割は師匠への恩返しについて。そして残りの2割は——。

「——当分、退屈はしなさそうよね」

真横から、イナギの絶叫が聞こえた気がした。

第二話 『二年越しの答え合わせ』（前書き）

閲覧くださり、本当にありがとうございます!!!
現在のPV544、ユニーク142

ハンター再開まだかなあ……

第二話 『二年越しの答え合わせ』

「……なんか変なの出てきたな」

「不純物が生まれたと。具現化系ね」

水で満たしたコップの上に軽くて水に浮く物を浮かべ、そこに対象者が錬を行い変化を見る。強化系なら水の体積が増え、変形なら味が変わる。具現化系なら不純物が生まれ、放出系なら水の色が変化する。操作系なら葉が動き、特質系ならばそれ以外の変化が起こる。

——水見式。個人が先天的に有するオーラの特性を見定める術の1つ。

修行の方向性を定めるためビスケが尋ねた際にイナギが自身の系統を知らない事が発覚したため、イナギが持っていたコップに傍の小川の水を汲み、落ちていた葉っぱを浮かべて行った物であった。

「具現化系か。それってどんなだ？」

「オーラで物質を具現化するのに特化した系統よ。とういかアンタ本当に何も知らないのね」

「爺が座学を重視するとでも？」

「——ああ、そういえばそうだったわね」

「念を覚えるのに、どうして俺はいきなり滝つぼに落とされなきゃならなかったんだろうなあ……」

ナチュラルに死に掛けた記憶が複数個、しかも雪国故あと数ヶ月先だったらだったら凍死確定。等々。

触れてはいけない部分に触れてしまったらしく、アラマに対する恨みとか辛みとかが一気に蘇ってきてクククといきなり黒化するイナギ。

それを見て、当時の私はそう見えていたのかとビスケは軽い衝撃を受けていた。

……ビスケにもイナギと同じような経験はある。例えば精孔を開く為に飢えた狼の前に放り出されたとか。

鍛え持った心源流の技を以ってして3匹を撃退したが、直後に足の肉をこつそりと持つて行かれ。怪我による出血で死を覚悟した所に兄弟子の1人が助けに来てくれた。

その後アラマ師匠を問い詰めた所、素で「説明が面倒くさかった」とか言われてマジギレした。結局精孔はその兄弟子に頼み込んで感覚を掴むのを手伝って貰ったのだが……その時の自分が今のイナギそっくりだった気がしないでもない。思い返せば兄弟子の目が妙に優しくった気も……。

万物は流転するというか、歴史は繰り返すというか。何となくビスケは又1つ人生の深さを学んだ気がした。全然嬉しくない。

「しかも結局それで精孔が半分くらい開いたからな。止め方が分からなくてやばかった所を丁度いいとか呟きながら無理やり開かれて1週間くらい本気で寝込んだ」

「寝込むだけで済んだの？」

「オーラが尽きかけて川が見えた辺りで、爺が念を使つてな。寝て回復した後で纏を習った」

「ホント無茶苦茶というかスパルタというか……よくアンタ生きてたわね」

「自分でもそう思う」

暗殺対策にと師事したにも拘らず、爺に師事した後の方が死に掛けた回数多いし。その分その相手は見知らぬ雇われ人から見知った爺に変わった訳だが……あれ？もしかして師事する前の方が楽だった？

「……アンタの苦労は分かったけど、それとこれとは別問題よ。詳しく説明してあげるから集中しなさい」

ピツと一指し指を立てたビスケは、相変わらず暗い……ともすれば五寸釘と藁人形を求めて街まで出かけていきそうなイナギに声を掛けてから説明を始めた。

「1度しか説明しないから本気で覚えなさい。……まずこれが六性図よ。6種類に分類されるオーラの系統の関係が示されてるんだわさ」

ビスケは傍にあった手ごろな大きさの枝を手にとって、地面にカリカリと六角形を描いた。その1番上に“強”と書き込み、そこから各頂点に上から“変”“放”“具”“操”“特”と書き込んでいく。

「上から強化系、変化形、放出系、具現化系、操作系、特質系。自分の系統にあった能力ほど覚えやすく力も強い。逆に自分の系統から離れた能力は習得に時間がかかり力も弱くなる……特質系はそうとも限らないけど、それを除けばコレは絶対の真理よ」

「つまり、具現化系はどうなんだ？」

「……さっきも言ったけど、具現化系はオーラで物質を具現化する能力よ。そして論理上では変化形が80%、強化系と操作系が60%、そして放出系が40%まで習得出来るわさ」

あくまで理論上で、真逆の系統は伸びが悪くて時間もかかるかなかなかそこまで鍛えきる人は少ないけどね、と繰り返すビスケ。理想は山形らしい。

「特質系を除く理由は？」

「覚えようとして覚えられる系統じゃないって事よ。その上他系統から突然変異したりもするから、あまり考えない方がいいわよ」

つまり先達が少ないと言う事で……自分が特質系でなくて良かったという所か。イナギは自身の系統が具現化系であった事に一先ず安堵した。

先達が少ないという事は、参考にする手本が少ない事とイコール。いくら個々によって能力が違うといっても、より高みを目指すならある程度開拓されている道の方が進みやすいというものだ。

「それで、アンタはどんなことがやりたいの？　フィーリングで何か良さそうなのない？」

「やりたいことか。……コレってのはないなあ」

目的が目的である以上戦闘特化用の念である事は決まっているのだが、そこに「具現化」という能力を絡めるとなると難しい。加えて応用が利き、弱点も少なく、消費オーラ量の少ない能力で、最大のパフォーマンスを発揮でき……等の希望を挙げていくともっと難しい。そして何よりも大切なインスピレーションというか、直感というかが、イナギの頭に全く浮かんでこなかった。

「……そう。具現化は能力の習得にかなり手間がかかるし、そうホイホイと変更することはできないからね。コレってものが浮かんでくるまで悩んで悩んで悩みぬいて決めなさい。勿論、六性図に合う形でね」

思わず溜息。続いて、強化系かせめてその両隣にある変化形化放出系がよかったのだがなどという思いがポロリと零れたが、直後ビスケに頭をはたかれた。始めから諦めていてどうするのかという事らしい。

「時間を上げるから、とりあえず考えてみなさいな」
「……分かった」

そうして説明は30分ほどで終わり、ビスケは今後必要な物資を補給しに街へ出かけていった。

それを見送ったイナギはしばらくその場で頭を捻っていたがそんなすぐにいいアイデアが浮かんでくるはずもなく、仕方がなしにそこら辺を散歩でもしながら考えることにした。

ゆつくりと流れる小川に沿って、ゆつくりと歩を進めていく。清らかな流れと一緒に微笑んでいるかの様な左右に広がる穏やかな森からは、小鳥達の陽気なさえずりが可愛らしく語りかけてきて、全てを優しく包み込む陽光の抱擁はまるで光のカーテンのよう。

そんなのどかさに変化された時間の流れは、長く伸ばされた水飴の如くのおんびりと歩を進める。……が、進んでいる事に違いはないわけで、1時間が経過してもいい考えがまったく浮かんでこなかった。

そもそも具現化などと言われてもピンと来ないのだ。物質を具現化する事にまったく惹かれない。わざわざ作るまでもなく、既存の道具を使った方が早いに決まっている。

それに何よりやりたいことなら既にあるのだ。具現化云々と関連性が皆無だけれど、やりたいことはと聞かれれば……やっぱりこれしかない。

兎に角ビスケに相談してみよう。イナギはそう結論付け、今来た道を変えらぬ速度でゆつくりと戻っていった。

▲

「で、何か形は決まった？」

あれからさらに1時間後。ビスケが街から戻ってきた。

何も持っていなかった事を怪訝に思ったイナギが尋ねてみると、なんと買った商品の全てをデパートがここ——家とか見当たらないところか、道路整備すらほとんどされていないこの森の中まで運んでくれるらしい。

支払いの際に責任者を呼んでハンターライセンスをちらつかせたら一発だわさなんて悪い笑みを浮かべるビスケを見て、イナギにまたもう1つライセンスを得る目的が増えた。殴られそうなのでビスケには内緒であるが。

「一応、決まりはしたが……」

「何よ、ハッキリしないわねえ。聞いてあげるからとりあえず言ってみなさい」

「……殴り合いだ」

「は？」

「だから、殴り合い。素手で闘ってる自分しか想像できん」

「——私の話、聞いてた？」

「勿論」

何ならさっきの説明を一字一句間違えずに説明するか？ なんて主張するイナギ（馬鹿弟子）。その余りの真剣さにビスケはわなわなと震え始め……

「どうした？」

「どうした、じゃないわよさ！」

大声で吼えた、耳元で。あまりの音量に三半規管がどうにかなった気がしたが、イナギは根性で膝を突くのを堪えた。

「私の話を聞いてたんならどうしてそんな結論になるのよ！ ……」

強くなりたいんでしょ？」

「なりたいが」

「肉体強化は強化系の分野なのよ、具現化系は肉体強化苦手なのよ」

「？」

「だろうな……だけど何とかなるだろ」

——自分の系統から離れた能力は習得に時間がかかり力も弱くなる。系統で見ると具現化系と強化系は2つも離れていて、具現化系による強化系能力の習得率は60%。つまり強化系を極めた強化系念能力者に、強化系を極めた具現化系能力者は40%足りないのだ。

しかしイナギには自信があった。それは心源流拳法に対してであり、それをアラマ爺から認められるまで修めた自分自身に対してであった。

イナギにとって念能力とはあくまで「戦闘補助の道具」である。確かに念の力は驚異ではあるが、それでもこちらが念を知ってさえいればイーブンになる。だから結局勝敗を分けるのは鍛えぬいた肉体と修めた技術であり、念は「補助輪」でしかない……そんなイナギの認識は、ビスケの懇切丁寧な説明を受けた後でも変わっていないかった。

だからこそこの発言なのだが、ビスケはそう受け取らなかった。即ち……「念なんてどうだっていい」。

「——イナギ、立ちなさい」

「……何だ？」

何となく嫌な予感を覚えて、警戒心を顕わにするイナギ。

「フ、フフフ。ちょっと道理をわきまえない馬鹿弟子に世間の厳しさっていう物を教え込もうかなってね」

「待て。それは俺か？」

「それ以外に誰がいるのよ？」

「——だから困ってるんだが」

「他でもないアンタよ！ 間違はなくアンタの事よ！」

「馬鹿な！ 暗殺者に狙われ続けたこの俺が世間の厳しさを理解してないだと！？」

「だったら師匠の言葉に対する態度を教え込むまでよ！！」

いやまあ確かにそれを得られることが出来る環境ではなかったが、最低限の配慮は有しているつもりだ。だからわざわざ教え込まれるほどの物でも——。

何だかんだ言いつつ言われた通りに立ち上がってから考えていたイナギだが、突如1歩後ろに飛び退いた。それからコンマ数秒空いて通過するビスケの足。

「いきなり蹴りとか危ないだろ！」

「そこで私悪くないですみたいな顔をするな！ そして避けるな、

師匠命令よ！！」

「それこそ無茶を言うな！」

「師匠が白といたらカラスは白くなる物なのよ！」

「黒いカラスが白くなるかつ」

ギャーギャー喚きあいながらのどつきあい。会話だけだと仲のいい少年と（容姿と声音のみ）少女の微笑ましい戯れでしかないが、現実では手や足が容赦の欠片もなく飛び交っている。加えてそれを行っているのは心源流を修めて念も覚えている猛者で、さらに2人は無茶苦茶本気であった。

拳のキレは凄まじく、蹴りの速度は恐ろしい程で、体捌きも尋常でない。仮に周囲に人がいたとしてはつきりと何が起こっているか理解できる者は数えるほどしかないだろう。それは常人の目に

捉えられるレベルではなかったのだ。

ドンドゴンという粉碎音が森に響き、周囲の様子は秒単位で変容していく。そして時が経つにつれイナギの悲鳴の様な絶叫が増え、ついには停戦を呼びかける懇願が入っても戦闘は止まらない。

——イナギがビスケに弟子入りしてから、僅か2日目の出来事であつた。

かささぎの梯

第二話 『二年越しの答え合わせ』

アラマ師匠が直々に修行をつけていたので当然なのだが、イナギの心源流拳法の技術はかなり高かった。さらに暗殺者に狙われていたことから学び取ったのか、実戦への心構えもどうしてなかなか完成している。

問題は、念能力と純粋な肉体面に関してだった。

前者については、四五行は習得していたがアラマ師匠に「それ以上の事はお前にはまだ早いッ！ 四五行を習得していれば簡単に殺される事もないだろうから、まあ頑張れ気合で」と言われていたとの事で、それら以外は素人念能力者とまったく同じ。

後者はハンター受験者達と同レベル程度はあつたのだが、イナギの目標——フランシール壊滅事件の真犯人探しとその殺害——を考慮すると思わず眼を覆いたくなるほど低かった。

しかしイナギはとても自分に正直だった。当面最大の目標である「生き残ること」について努力を惜しむ気はさらさら無いらしく、それこそ常人なら裸足で逃げ出すような、血反吐を吐く程の修練を修めたのだ。

その上念に関してはセラード家の血の後押しがあつた。呑み込みはそれほど早くはないのだが、ある程度まで習得した技能の底上げは驚くほど早い。1週間で鍊の持続時間を10分以上増加した時にキレそうになったのもいい思い出である。

今なら例えハンターとして危険な事態に直面しても、かなりのレベルまで十分対処できるだろう。結果としてビスケはそんな確信を抱くまでになっているが、かといってイナギが自分の元で修練している間は手を抜く気も抜かせる気もまったくなかった。

「ほらほら、ペース落ちてるわよ。はい後66ー、65ー、64ー」
「グッ……やはりコレは無謀だ……！」

——腕立て伏せを始めて1時間。錘は開始時の倍である2トン
を優に超えている。その上念使用の全面禁止。並のプロハンターなら30分と保たないだろう。

にも関わらず、イナギは今なおそれを続けている。そんな存在を自分が磨き上げた事が嬉しくて、気が付いたらビスケはそれは楽しそうに宣言していた。

「ハイまだ楽そうだから100キロ追加ー」
「グハッ——」
「はい後100ー、99ー」

そんなこんなで——イナギが弟子になってからはや2年の月日が流れていた。

世間の厳しさと師匠の残酷さを身を以って体験した後。師匠の言葉の正しさやそれを素直に受け入れる事の有用性を全力で説かれた結果粗大ゴミみたいになったイナギにビスケが改めて話したのは、

具現化系は単純な力勝負にものすごく弱いという事実である。

なまじっか心源流拳法をそこそ修めているだけに、単純な力勝負を極めれば何とかなると思ひ込んでいたらしい弟子の先入観を物理的手段を含めて叩き潰したビスケは、彼に対して課題を与えた。即ち——勝つ為の戦闘スタイルの確立。それに付随して系統に合った念能力の集大成・発の思索。

それを思うようにいかない物事に対して驚くほど気に病む性質の（普段はゴーイングマイウェイなので表に出ないが）イナギに、自身が納得する形の具現化系に合った能力を考えさせる為、2年間という長い時間かけて考えさせることにした。

そして今日、その答えを聞くことになっているのであるが……であるが。眼の前のコイツときたらそんな事まったく気にしていないような様子で、せっせと昼食の準備をしている。

……もう少しきつく叩きのめしておくべきだったか。

顔を軽く傾けて、天高くで煌々とまぶしいくらいに輝いている太陽と頭上一面に広がる雲ひとつない青一色の空を視界に入れながら、もし仮に今後弟子をとることがあったならもう少しスパルタでいこうと固く心に誓った。



食事の用意は、全てイナギの担当だった。

そして簡単に街まで出て行けない上に、そもそも出て行っても財布が空なので惣菜で済ますという事が出来ない以上、それらは全てイナギの手作りとなる。

——川から魚。森から山菜と木の実。そして動物。

生活している場所が場所なだけあり幸い材料はそこらじゅうに溢れていて、イナギ自身母親が亡くなってから1人で生活していたので料理はお手の物。アラマ爺に山中に放り出された事も1度や2度ではなく、サバイバル経験も豊富だった。

本日の昼食は山鳥と山菜の汁物、川魚の焼き物、それに木の実。昼食にはかなり豪華だが、イナギにしてみればまだ足りないといった感じた。

……そう、今日は2年越しの課題の答え合わせなのだ。

明確な答えが存在しないとはいえ、余りにも的外れな答えを出せばあの時以上にボコボコにされるのは目に見えている。

あれ以来「発」の決定が半ばトラウマ化しているイナギにとって、今日という日は戦争であった。少しでもビスケの機嫌を取っておくのも作戦の1つである。プライド？ そんなもののあの恐怖を前にすれば無価値だ。プライドで解決できるなら今こうしてスープをビスケの皿に甲斐甲斐しくよそつてはいない。

とは言ってもイナギ的に最良の答えであるという確信はあるのだ。そうそう的外れの答えでもないという自信もある。

問題は眼の前の彼女にそれが認められるか否かであって――

「む、あげないわよ」

——こうやって悩んでいるのが馬鹿らしくなってきたな。

自分の皿にもスープをよそつて、いつも椅子代わりとして使っている腰より少し低い高さの岩へと座る。そして木製の手作りレンゲを使い、ガツガツと食べ始めた。

「イナギ、この後の予定覚えてる？」

「……答えあわせだな、2年越しの」

「自信の程はどうなのよ？ ふざけた答え出したりしたら、今度は9割がた殺してやるわよ」

そこまでいくと普通時間経過で死ぬよな。実質殺害宣言だよな！
んふふと黒い笑みを浮かべるビスケにイナギは怯える。この笑みを浮かべた時のビスケは本気なのだと、イナギは短くない師弟と

しての生活の中で悟っていた。

だがしかし。だからこそ虚勢を張ってみる。

「問題ない。母に会うのはまだまだ先さ」

「そう？ 案外アナタの母親も会いたがったりしてるかもよ。それと——膝震えてるわさ」

「震える物かよ。その手にはもう引っかかるか」

ビスケは小さく舌打ちしてから、わざとらしくよよよと泣き崩れた。

「ああ、初めの頃はあんなに可愛かったのに……あの純真で真っ直ぐで遊ぶと楽しいイナギはどこへ行ったのかしら」

「総じてアナタに汚されました！—————というかやつぱり遊んでたのか」

「当たり前よ。弟子は弄くって何ぼ。私がアラマ師匠から学んだ事の1つだわさ」

………そういえばこの人もアラマ爺の弟子だった。恐るべし爺の影響力。もはや感染症と称しても問題ないレベルにまで達している気がする。全く褒められた事ではない上に恨みがどんどん募っていくが。

「ま、膝は震えて無くて心は震えてるんでしょうけどね」

「———つ！」

「ほうら、ね」

いつの間にか近寄っていたビスケに膝頭をツツツと触られ、イナギは必要以上に反応してしまう。飛び上がった拍子に手から放れかけた皿の中身を零すのは避けられたが、その様子がさらに面白か

つたらしくビスケはニヤニヤとした笑みをさらに深めた。

「大丈夫よ、安心なさい。可愛いアンタもまだまだしっかりというわさ」

全くもって嬉しくなかった。

ビスケは悠々と自分の指定岩まで戻り、置いてあった皿の中身を再び物凄い勢いで食べ始める。途中水を飲んだり焼き魚を取ったりスープをおかわりしたりと休めたりもするが、基本的に口は動かしっぱなしだ。

「……ビスケ」

「何よ」

「その体でよくそんなにたくさん食えるな。どこに入ってくのか教えてくれないか？」

ピクリとビスケの米神が動くが、知った事ではない。

「やられたらやり返せ」。セラード家の家訓である。

「何が、言いたいのかしら？」

「特に何か言いたいわけじゃない。ただ、その年齢の少女の体のどこにそれだけの食料が入っていくのかが気になった。それだけさ」

——50代後半なのに、よくそれだけ食べられるな。本体の維持にでも使ってるんじゃないのか？

多少オブラートに包んだが、意識するところなる訳だ。ビスケはその意を正しく理解したようで、イナギにとっても綺麗な笑みを向けた。

「——イナギ。この後の答えがふざけた物だったら、責任もってお

母様に会わせてあげるわ」

「……問題ない。母に会うのはまだまだ先さ」

「膝、震えてるわよ？」

……今度は本当だった。トラウマ刺激されまくりである。

結局作戦は水の泡。イナギは自らの手で引き上げる結果となつたハードルの高さを思い絶望する。

何故に自分はこんなにもリスクの高い喧嘩を買ってしまったのかとか、そもそも買う必要はなかったんじゃないのかとか、果てはどうしてセラード家の家訓はこんなにも危険でくだらない物なのかとか、いろいろと自問してみるも答えは出ない。生存率を上昇させる秘策も思いつかない。

——いや、ビスケを説得できさえすれば問題はないのだ。というか生き残る道はそれしか残されていない。

イナギは5分かけてそんな結論に至り、この後の一波乱を耐え抜くべく自身の皿に盛り付けたスープを掻っ込む。そしてさらに鍋から装おうとして……

「ごちそうさまでした」

「……お粗末さま」

鍋の中身どころか、昼食が綺麗になくなっていた。

▲

「それじゃあイナギの望む勝つ為の戦闘スタイルと、そのための発案を聞かせてもらおうかしらね」

後片付けも終わり、一息ついた昼下がりに。

思わず身を任せて夢の世界に旅立ちたくなるような風がそよそ

よと吹く中、イナギの正面に仁王立ちしたビスケがそう切り出した。

「先に断っておくけど、途中で話を止めるなよ？」

「当然だわさ。素直に黙って静かに聞かせてもらうわよ」

「……オーラはそうは言っていないみたいだな」

「あら失礼」

とは言いつつも、ビスケの体から迸る凄まじいまでのオーラと殺気は変化なし。致死量のそれらを感じつつ、イナギはスクツと立ち上がった。

「まず始めにだが、俺は正面からの戦いを極めたい。というかいくら戦う姿をイメージしてもやはりそれしか思い浮かばない。思い浮かばない以上、俺にはこの体のみを使った闘いしか出来ない。それが前提条件だ」

ピクリとビスケの頬が吊りあがったが、意図的に無視する。

「その上で出した結論が——鎧だ」

「鎧、ねえ。具体的な内容は？」

「内緒だ」

ビスケのこめかみに見事な井形が出来上がる。見なかったことにした。

「……内容は？」

「だから、内緒だ」

「——冗談？」

「本気だ」

とうか当たり前だ。例え師弟の仲といえども教えていい事と教えてはいけない事がある。そしてこれは確実に後者だ。自分の命を守る術を他人にほいほい教えてどうするんだという話である。

「師匠の事を信用出来ないって言うの？」

「信用出来る出来ないの問題じゃない」

むしろ自分の秘密がばれた時に疑いたくないから、相手を信用しているからこそ伝えたくないとも言える。

……所詮、詭弁でしかないのだけれど。

「――創り上げるのは鎧。俺に言えるのはそれだけだ」

判断は任せる。意を決して宣言したイナギは、しかとビスケを見つめた。が、彼女とは目が合わなかった。無視しているのではない。イナギの視線に気づかない程考えに熱中しているのだ。

考えるは、想像するはイナギの能力の全容。彼の戦っている姿。戦闘姿勢との適合性。3分ほど経ってから、ビスケは漸く視線を上げた。

「1つだけ聞かせて頂戴。その能力を使って闘ってる自分に違和感はある？」

「ない……とは言えない。けど、これは恐らく慣れと共に消えていく類の物だ。何より考えた能力の中でこれが一番しっくりくる」

要は感覚の問題だ。そればかりは他人にとやかく言われても何ともならない。

すると顎に手を当てて難しい顔をしていたビスケは、ふうっと大きく息を吐いた。

「本当にアンタ不思議な性格してるわよね。ある方面にはとことんズボラなのに、ある方面にはとことん神経質。そこまで極端な人間はなかなかいないわよさ」

「……命に関わるかどうかの違い。それだけだ」

「だとしてもよ、まったく。どうやったらそこまで捻くれるんだか」
「捻くれてるつもりはないんだが」

「自覚もなし、と」

情け容赦ないセリフである。しかしイナギには痛くも痒くもない。だって事実捻くれているから。何言われても全然気になっていない辺りとか特に。

「ま、実を言えばアンタが考えた念能力にダメ出しするつもりなんて殆どなかったんだけどね。余りに酷い場合は別だけど、その様子なら多分大丈夫そうだし」

「——ちよつと待て」

「何よさ」

「あの脅しは全て嘘なのか？　嘘なんだな？」

「あら、お望みなら本当にしてあげましょうか？」

……あれ、墓穴掘った？

「全力で遠慮させてください」

「素直でよろしい」

笑顔が爽やかでそこはかとなくむかつくイナギだったが、目先の衝動より明日の命。石橋は叩いてから先に誰かを渡らせてみるくらいの気概で、彼はごく普通にスルーした。

「ま、自分で宣誓や制約、付加する効果は考えておきなさいよ。――」

応説明はしてあるけど、具現化がどうしても出来なかったら聞きに
来なさい」

「ああ。どうしようもなかったらそうさせてもらっ」

「……ま、別にいいけど。ただ後悔だけはしないようにね」

イナギは深く頷いた。念への思いは力になる。だからこそ見限
った念を持つ者は、いつかその念に見限られ死ぬ事になるだろう
か。

そんなイナギの様子に感じ入る所が合ったのか、ビスケはうむ
うむと頷いている。

しかし突如動作を止めて、ああそういえばあれがあったかとい
う風にポンと手を叩いて曰く、

「そうそう、そういえば卒業試験は私とのタイマンだわさ」

「どっちにしる俺の能力知られる事になるよな！」

「だったら使わないことね。そうすれば知られないわよ」

「それは遠まわしに死ねと言ってるのか？」

「ああ、きつとお空の向こうでお母さんが手を振ってるわね」

「人の母親使って自殺を促すな！——いや、他殺か」

「どちらにせよ、下手な能力だといろいろと終わる事になるわよさ」

以降紆余曲折を経た結果、抗議は全て却下されたただけ記して
おこつ。

第三話 『いい日旅立ち』（前書き）

閲覧くださり、本当にありがとうございます!!!
現在のPV1153、ユニーク252

念能力考えるの楽しいよね、中二病だね俺！

第三話 『いい日旅立ち』

「——ッ！」

信じられない程の拳速。凄まじいまでの拳圧。自分の遙か上を行く技量。

ビスケの本気は知っていたつもりだった。この姿の彼女とやりあうのだって初めてではない。だったら後は発の差……戦闘用に作った自分の念と、それ以外のために作ったビスケの念。それが勝敗を分けると思っていた。何とか勝てると思っていた。

……甘かった。まるで認識が足りなかった。

「どうしたのよ、動きが鈍ってきてるわ」

壁の上からの一撃。全力で出しているにも拘らず、それはいとも容易くガードを抜ける。衝撃は全身へと響く。頭が揺れた。

それでも前へと出る。捻った体を勢いに変え、発——具現化した巨大な拳がビスケを貫く。

吹っ飛んだ彼女に追撃をかけるべく、自分の物を上回る大きな具足を作り出す。コンクリートの床を陥没させ、限界を超える速度で前へと出る。

同時に拳を腰に当て、可能な限りのオーラを貯める。壁にビスケが打ち付けられるのと同時に間合いに入る——肩から具現化した腕が伸び、自身の5倍以上の大きさの拳がビスケに叩き込まれた。

……直後、まるで諭すような声が聞こえた。

「……放つのはいいけど、戻しが遅い。それにまだまだ強度が足りない。もうちょっと経験つまないとこの大きさは無理みたいね？」

「クッ！」

咄嗟に伸びた「腕」を戻そうとして、激痛。

具現化した拳が無残にも潰され——瞬間、爆発。

もうもうと破壊されたコンクリートによる噴煙が立ち昇る中、まるで潰されたかのような激痛が襲いくるその右拳を無意識に庇いながら、俺はニヤリと笑みを漏らす。

「不用意に潰すからだ……ま、これで」

「これで、なんだい？」

耳元から聞こえた声に振り向く——前に後頭部に衝撃。撒き戻されたビデオテープのように、同じ軌跡を描いて、同じ場所に叩きつけられる。

警戒をしていたにも拘らず……まったく捉えられなかった。

「さて、じゃあお返しに一発いつときでしょうか」

その声を知覚したのと同時に、迫る拳。

——少なからず心を許しているビスケにフォートレス・繭籠りは使えない。かといってあの拳に込められたオーラの強大さ。アノラック・攻性防壁じゃ破られる……この距離だと、確実に死ぬ——！
考えるよりも先に、体は動いていた。ありったけのオーラを込めて堅を出し、同時に頭部を庇うように両腕を前に出して——

「——死ぬんじゃないよ」

——その上から、凶悪な一撃が叩き込まれた。

ただっ広い、本当に何もない部屋である。

上には眩しくない程度の照明が部屋全体を等しく照らせるようにと配慮して配置されており、室内には観客はおるかそもそも客席といったものが存在していない。

周囲の壁はコンクリートが剥き出しで灰色一色に染まっており、それは天井や床下も同じだった。

壁紙など張られておらず、所々壊れているのが唯一の模様といえそうである。ステージやロープなどない。観衆すらいない。ここはまさしく決闘場だった。

その部屋の中央で、2人の人間が対峙している。

片方は仁王立ちになっていて、もう片方は荒い息を吐き出しながら地面に座り込んでいた。

「——さて、これで最終試験は終了だわさ。一応及第点を与えられる出来具合さね」

「……さよですか」

本当に疲れたと誇示するような、それでいて安堵の響きを含み、その上少しでも得意げな雰囲気をつたった溜息が吐き出される。

その動作を行った青年は、その顔にまるで少年のような笑みを微かに浮かべている。

その目には、これ以上ないというくらいの喜びを孕んだ光が宿っていた。

かささぎの梯

第三話 『いい日旅立ち』

「発」の開発からちょうど3ヶ月が経過した今日。

殆ど整備がされておらず、複数の山の縁に沿っての移動ため車で約3時間の道程。それをショートカットに次ぐショートカットによりたった半分の時間でやってきたのは、勝利の女神の名を関するショッピングモール「アテナ」だった。

世界的に有名な企業が複数出資して建設されたそのモールだが、ただ大きいだけではない。一般でないお客様のニーズにも対応できるようにと建てられたその建物には、ちょっとしたお遊びからかなり危険なものまで何十もの秘密が存在する。

そしてイナギとビスケが使用した部屋もその1つ。何が起きようとも見ざる聞かざる、その上有名な企業が出資している施設だけあり公的権力も手出しが出来ない。多少血生臭い噂が流れる、コンクリートで塗り固められた使用用途自由の巨大な一室であった。

——そこを出てから15分。ショッピングモール「アテナ」の一角、衣料品販売を主とする店の中にイナギの姿があった。

その理由は言わずもがな、ビスケにより廃品回収確定な程度にまでボロボロにされた服の代わりを購入するためである。

「……ありがとうございました」

カードで支払いを済ませたイナギにかけられる店員数名の若干警戒するような声。別に買い物に時間をかける性質ではないけれど、今日のそれはいつもに輪を掛けて短い。

気だるげな様子で南国風に統一された店を出たイナギに、その原因から声が掛かった。

「早かったわね……ま、あと5分遅れてたら無理やり引きずっていったけど」

「だろうな。——そして、だからだよ」

— その原因も言わずもがな、やっぱりビスケであった。

早く行くわよついてきなさいと言わんばかりにフリルをあしらった少女趣味なスカートを翻して歩を進めるビスケに、「アテナ」の文字が入った袋を片手にやれやれと肩を竦めながら後に続くイナギ。

その様子は、どこからどう見ても仲のよい兄弟か幼馴染である。

「さて、と。とりあえずホテルかどこか行かなきゃね」

「ああ。まずはシャワーだな。兎に角汗を流したい」

例の部屋にもシャワー室が設置されているにはされていたのだが、しかしそこからどうにも嫌なオーラが感じられて結局使用を避けた２人だった。加えて何となく、微かに血特有の生臭さがした気がしないでもないが、真相は分からないし分かつとも思わない。見ざる聞かざるはお互いに、である。

「それに、長時間こんな格好でいるのは勘弁願いたいな」

そう小さく呟いたイナギの井出達はかなり酷いものだった。衣服は勿論、イナギ自身もボロボロである。まるで「自分危ない事してきました」と大声で叫んでいるような物であり、周囲の人たちもそれを察して自発的に道を譲っている。

今はまだいいかもしれないが、あまり長い間この状態でうろついていると職務質問される可能性が高い。無闇にライセンスを振りかざすような事態はあまりよろしくない。

「そうねえ、下手すれば捕まるものね。私はともかく、アンタは」

「……というかビスケの服は何で破れてないんだ？」

「特注よ、特注。結構な負荷に耐えられる素材と造りをしてるのよ
さ」

「なるほど。ま、そうしなきゃ着替え持つて歩かなきゃならなくなるしな。妥当な判断か」

「——もしかして、もしかしくとも喧嘩売ってる？」

「いやいや、そんなことはないが。それとも心当たりでもあるのか？」

何となく怒ったら負けな気になり、グツと返答に詰まるビスケ。それを見てニヤリと口元を歪めるイナギ。分水嶺ギリギリの会話だが、まあいつもの事である。

「——フン。いいわ、覚えてなさい」

そしてビスケが矛を収めるのもいつもの事であった。ちなみにイナギが見極めをミスって殴り合いになる事との比は9：1。イナギが少なくとも月3回はボコられる計算になる。

「……それにしてもあんたの能力だけどさ、どうしてなかなかいいじゃないのよさ。まさか具現化系能力者と無手のガチンコ勝負でそこそこ拮抗するとは思わなかったわよ」

厳密に言えばイナギは「鎧」を装着していたような物なので無手という訳ではないのだが、まあそこはそれ。

ビスケは己が弟子の成長具合にかなり満足したようで朗らかに笑っているが、それを聞くイナギの顔は喜ぶどころかむしろ冴えない物だった。

「……終始ボコボコにされていた記憶しかないんだが」

「終始って程じゃなかったと思うけど。具腕が爆発した時は正直どうしようかと思ったわよ」

「……それだって今回出す気はなかったんだけどな。何よりも隠さ

なきやならない秘密を丸裸にされた気分だ」

言葉尻は軽いが、しかしイナギの内心はかなりブルーである。ビスケのような戦闘に直接関係ない能力なら兎も角、戦闘用の能力はどれほど隠そうとしても過ぎるという事はない。その漏洩はイコール戦闘での死に繋がるのだから。

最もそれは念だけでなく戦闘者の情報全てについて言える事だ。ただ念は基本的に戦闘者が何よりも頼りにするものであり、つまるところ漏洩が致命的であるという傾向が何よりも顕著であるというだけで。

……戦闘行為に及んで、勝てなかった事が何よりの敗北——。
試験の内容を思い出して、イナギはムスツと黙り込んだ。

「そりや仕方がないわよ。念はもちろん、心源流拳法にしたって私の方が何倍も先輩なのよ？ 何十年という年月の積み重ねのさらに上に行きたいなら、それ以上の年月か、それ以上の修練か、それ以上の才能が必要よ。——幸い、念に関してのアンタの才能はなかなかの物。たった2年でここまで来たんだもの、誇っていいわよ」
「誇張でなく、本当に立っていただけなのか？」

まだまだだと首を振るイナギを、ビスケは黙って横目に見ていた。

確かに、イナギの念の才能は“なかなか”。セラード家の血を引くだけあり、10万人に1人という才能を持っている。……が、その程度の才能の持ち主ならハンターを探せばそこそこ居る。

——むしろ注目すべきなのは、武の才能。

彼が生まれつき有するそれは尋常でない。それこそ何千万人に1人というような……そう、言ってしまうえば“天賦の才”を与えられているのだ。

己に成せ得ない事を気に病み過ぎるという一見悪しき性質も、

ここではプラスに働いた。何故なら練習をすればするだけ結果がついてくるのだから。例えその時に成せ得なくても、直ぐに限界の上限が上がる。留まる事を知らない、先が見えないほどの、可能性。

ビスケとて武の才がないわけではない。どこか、かなりの物を持つている。そこに加え長年の修練。ある意味彼女は、常人には到達不可能な一種の極地にまで辿りついていると言っている。

だが、イナギのそれはレベルが違った。

ビスケをして嫉妬を覚えさせ、畏怖を感じさせることすらあったイナギの武の才――。

「……まあいい。目標は、5年以内だな」

「――抜いてみなさいよ。軽く返り討ちにしてあげるわ」

――ビスケは笑う、ひどく陽気に。

5年あれば、現在16であるイナギの肉体も完全になる。今はまだビスケに届かない技術も、センスも、胆力も、何もかもが見違える程成長するだろう。念を使わない純粋な格闘なら、下手をするに本当に5年で負けるかもしれない。

――面白くて、楽しくて。そして、何より嬉しいのだ。

ビスケが辿りついてしまったある境地の、さらにその上を見られるかもしれないという事実が。その境地に辿りつく傑物を育てたという、何よりも誇らしいその愉悦が。

「――ああ、それにしても楽しかったわよさ、卒業試験」

「……俺は楽しくなかったが」

「ちなみに私は嬉しくすらあったわよ？」

――アンタの為りうるであろう将来の姿、その片鱗を感じる事が出来て。

……そうですか。そんな万感交ったイナギの呟きすら、今の

ビスケには極上の美酒に感じられたのだった。



近くて、安くて、ある意味美味いと三拍子が揃ってる。そんな良く分からないビスケの主張により、シャワーを存在意義が9割方ニヤンニヤンという宿泊施設で浴びる事になったが、そこはそれ16と55（の外見は10代前半）。

特に問題が起こる筈もなく交互にシャワーを浴びてすっきりした2人は、「アテナ」の一角にあるとある飲食店の中にいた。時間と、そして何よりおなか具合が主張した結果である。ちなみにビスケは腐るほど持っていて、対照的に腐るものすらないイナギはしかしビスケに無利子無期限で借用する話が既に付いているので、懷事情は蚊帳の外だ。

「すいませーん、追加でカルボナーラ1つ……」

「カルボナーラは2人前で——ついでに海の幸リゾットとアンチョビピザも頼む」

話は変わるが、動くという行為はエネルギーを消費する。それはその動きが激しければ激しいほど増えていくものであり、闘いという行為は最たるものだろう。そしてそれが真剣さを伴うものであれば尚の事。

「あとは……オニオンスープと、フランスパンを3人前」

「はあ……それでは確認させていただきます」

「いや、別にいいから早く持ってきてくれ」

「……はあ」

——で、何がしたいかといえば。

現在、2人は鬼のように腹が減っていた。だから、鬼のように食事をしていた。

その鬼気迫る様子は、お昼時という事で店内にいた客が粗方帰ってしまい店にプチ閑古鳥が鳴き始める程。かといって2人客としては異様な程、具体的には4人がけのテーブル2つに所狭しと並べられているくらい注文するので追い出すことも出来やしない。ある意味最高に性質の悪い客であった。

「……追加でこの白身魚のワイン蒸しを1人前頼む」

「えーと、あの……」

「——なんだ？」

「いえ、そのお……胃薬、買ってきてきましようか？」

「いや、大丈夫だ」

「……はあ」

「あ、ついでにソーセージの盛り合わせを3つお願い」

「……了解しましたー」

もう店員涙目。そして店の奥で調理している料理人3名も別の意味で涙目。

いくらそう大きくないとはいえ、たった2人で厨房を長時間でんやわんやさせ続けるのは如何なものか。いくらそう大きくないとはいえ、書入れ時に2人しか居ないにも関わらず売り上げが普段の半分近くあるのも如何なものなのかっ！

「注文お願いしていいですかー？」

「……はいどうぞー」

そしてその店員は、「ああ、こういう人たちがバイキング形式の店を潰すんだろうなあ」などと投げやりに考えて居たりした。



「——あー、しっかり食べたわね。満腹だわさ」

「確かに少し苦しいな。食べ過ぎたか」

30分後。頼んだ品をきっちり片付けた2人は、何故かサービ
スされたアイスコーヒー片手に寛いでいた。ちなみに店内には少し
づつ客が戻りつつあったりする。時間の流れもどこか緩やかだ。

「——そうそう、そういえばそろそろハンター試験が近づいてきて
るわさ。もう申し込みは済ませたの？」

「いや、まだだ」

「なんでよ？」

「……ライラから追い出された方法が正規のものじゃなかったから
な。脱出した時点で行方不明扱いになってるだろうし、それは今も
変わってない。そして多分後数年で死亡判定……今後の事を考える
と、“イナギ”セラード”は死んでた方がやりやすいからな」

死亡判定されても、真実本人が名乗り出れば判定後でも解除さ
れるだろうしなどと話すイナギに、ビスケはジトツとした目を向け
た。

「確かにそっちの方がやりやすいかもしれないし、死亡判定解除も
可能だろうけど。……ハンターライセンス取得に、身分証明は別に
必要ないわよ」

「——は？」

「だから、ライセンス取得に身分証明は必要ないのよ。というか取
得しさえすれば、ハンターライセンスが最高の身分証明になるし」

「……何か間違ってるのか、それ」

「無理を通せば道理が引つ込むのよ」

ちなみに、無理を通し続けてきたのは過去のハンター達であったりする。

——ハンターライセンスというのは、真に奇異なものである。例えば死人であろうと……つまり偽名であろうとも社会的に存在しない事になっていても、登録されさえすればそれが公的な存在であると認知されるのだ。

かといってどういうわけか同一人物が再びライセンスを取得する事は出来ないし、さらにそのライセンスカードを他人が使用するのも不可能であるらしい。本当に訳わかんねえ。

「ちなみに申し込みはハンター試験応募カードか、電腦ネットで簡単に出来るわよ。ま、前者の場合郵送してくるのを受け取るのに住所の記名が必要だけど、後者ならそれすら必要なし」

「……どれだけ無理を通せばそんなに道理が引つ込むんだ」

「一杯よ、物凄くね」

何だか、物凄く疲れた気がしたイナギだった。きっといろいろと間違ってると思う、ハンターライセンスは。

……や、だからこそ取れた時の甘みが大きいんだから問題ないか。問題ないな。問題ない。

「ま、これで問題は解決したわね。それじゃあ近くのネットカフェでも行って、さっさと登録を」

「いや、まだ聞きたい事がある」

「……何よ」

何か予感があるのか、ビスケは物凄く嫌そうな顔をする。そしてその予感は当たっていた。

「ふと思っただが、行方不明扱いになつてゐる戸籍の権利って手に入れられないか？」

「出来るか出来ないかで言つたら答えはイエスだけど……やんないわよ」

機先を制される形になつたイナギは、言葉に少し詰まつた後ゆつくりと話し始めた。

「ハンターライセンスって、2度取るとは出来ないんだよね？
例えば名前を変えたとしても」

「まず不可能ね。ハンター協会を騙しきる事が出来る人なんて存在しないでしょうから」

ハンター協会自体がその不正を黙認した場合は別だけど、とビスケは小さく付け加える。

「俺は、そのライセンスの登録を本名で行いたい。一生使用するかもしれない身分証名称が偽名なんてのは、正直勘弁願いたい。幸い、ハンターライセンスは俺みたいな行方不明扱いの人間でも取れるみたいだしな」

「……アンタ自身とは別の戸籍の方は手に入れたとしてどうすんのよ。言つとくけどその戸籍の顔をアンタの物に返るのは……不可能じゃないけど、無茶苦茶高くつくわよ」

戸籍などに記載されている身体情報の大幅な変更を行う場合、DNA判定を含めた生体データの確認が必須である。そしてDNAを誤魔化すのはどんな人物であれ不可能であり、かといって国際人民データ機構のデータを書き換えるのも不可能（それすら可能な念能力者がいるかもしれないが、それは度外視する）。

そのため変更しようとした場合、まず協力者（戸籍主）Aを望

む顔へと整形させ、それを国際人民データ機構に認知させた上で入れ替わるという過程が必要となる。その上情報変更者は定期的にその確認を余儀なくされるのだ。正直それを成そうと思ったら、並大抵の労力じゃ無理だ。

しかし、イナギはその言葉に首を振った。

「そうじゃない。俺が欲しいのは、例えばパスポートを使用したり物品売買を行うといった一般的な状況で使える“イナギ”セラード”以外の身分だ。そして変わるのは戸籍ではなく、むしろ俺の方”アンタ、もしかして……”

「そう、外見を変化させる能力を持つてるんだよ」

結果的に能力を自らばらす事になってしまったが、仕方があるまい。今のイナギにこの手の相談で頼れるのはビスケしかないのだから。……それに、心のどこかに「ビスケなら」という甘い囁きがないといえは嘘になる。

——その時点でもはや今更か。多分、念能力を使用した闘いでイナギは一生ビスケに勝つ事など出来ないだろうから。

ふと心の中に生まれた、苦くて同時に甘い考え。しかし表に出す事は許容しない。

「——変わるのは、俺の方だ」

「……一応聞くけど、外見変えられるなら何でもう1度ハンターライセンスをとろうとしないの？」

「その答えは、さっきビスケが言った通りだな」

——ハンター協会を騙しきる人なんて存在しない。そういう事だ。

「……分かったわよ。取ってあげるわ、その戸籍。で、何か要望は

あるの？」

「背は絶対に俺より高く。後、可能な限りで構わないがその人物の情報が欲しい」

「情報？」

「ああ。趣味思考から立ち振る舞い、癖や性癖に到るまで。写真や映像、体の一部なんかもあればいい。何でもいいから、出来る限り多くの物を。……あ、あと犯罪者は止めてくれ」

対象への理解が深ければ深い程、対象をイナギが受け入れていればいる程、誤差が少なくなり消費オーラ量が減少する。現在イナギが欲しているのは長時間変化する“もう1人の自分”とでも言うべき存在なので、情報がどれだけあろうとも多過ぎるという事はなかった。

「任されたわ。どんなに長くても2週間以内で揃うわよ」

「よろしく頼む。——どうしたんだ、そんなにニヤニヤして」

「いや、それよりも聞きたい事があるんだけどさあ……」

言葉と共に体勢を逸らして背もたれに体を預け、大げさな動作で足と手を組む。その姿はこのマフィアだと思わず言いたくなるくらいで、見下すような視線が似合う事似合う事。本物でもこうはいくまいというような雰囲気醸し出している。

……惜しむべきは、それを行っているのが可愛らしいドレスに身を包んだ見た目少女である点か。体面しているイナギは兎も角、傍から見ると遊んでいる可愛らしい少女にしか見えない。

「何よりも肝心な事なんだけど、さ。……アレはどうすんのよ？」

「晩飯か。久しぶりに肉料理でもどうかかな？」

「違うわよ！ その無駄に爽やかそうな笑顔もいらない！ 金よ！ 戸籍を手に入れるための金の話よッ！！」

そしてそれも即行で崩れた。イナギから見ても可愛らしい少女にしか見えない。……最も見た目だけであるのだが。

「……まったく、口を開けば金金金と。世の中には金で買えない物もあるというのに」

「生憎戸籍は金で買える物なの！金はどうすんのよ！？」

「弟子の門出を祝つての餞別とか？」

「——ふざけんじゃないわよ！」

ガタツと音をたてて身を乗り出すビスケ。店内の視線が集まるが、特に気にした様子はない。店員の「はやく出てけ」な視線については気づいてすらいない。

「チツ、心が狭い師匠だ。……というわけで、出世払いで1つよろしく頼む」

「誰の心が狭いよ、誰の！」

「……」

「無言で指し示すなあっ！」

フルマラソン出場者みたいに息を荒げるビスケ。相変わらず店内の視線が以下略。店員の「頼むからでてってください」な視線も以下略。

「……兎に角、貸しに追加って事でいいのね？」

その後ビスケはテーブルに突っ伏して何かを押さえ込むように全身を震わせていたが、ものの数十秒で立ち直る。そしてやっぱりこれもごくごくありふれた日常の一場面なのであった。

「うむ、よろしく頼む」

「なんか偉そうでむかつくわね。——っか耳そろえて絶対に返さないよ」

「任せろ。貨幣価値が下がった時を見計らったり、等価ではない交換で返す気はある」

「普通に返せええええええ！！」

狭い店内でいきなり始まった殴り合い。室内の備品や人物にまったく触れていない辺りからレベルの高さがうかがえるが、正直無駄すぎる技術の冴えである。

なんかこう、もういろんな意味でダメダメだった。このちつこののがハンターだと言っても、絶対に誰も信じねえ。

——お天道様が少し下がりはじめたこの時刻。

「アテナ」の一角に、少年と少女が互いを罵り合う、しかしどこか楽しい声が響き渡っていた。



その後、イナギは近くのネットカフェでハンター試験の応募を済ませた。試験会場は「エルベガ」。ヨルビアン大陸の北方、海岸から少し離れた内地に広がる砂漠地帯の真ん中に建設された、ギャンブル都市だった。

ビスケに頼んだ戸籍はきっかり2週間で届いた。名前は「キミト・リッチマン」。身長は今のイナギより10センチほど高い177センチ。犯罪歴など経歴に気に入らない部分も特に無く、変化するのに大よそこれ以上ないと思える条件を満たしていた。

ビスケによる厳しい修行は相変わらず続いていた。しかしその合間に試験の準備や、修行場所を引き払う用意、それにビスケ主催による「ハンター試験徹底合格講座」なる座談会が行われ、やはりいつもとは違うそんな毎日。ふとした事で何気なく感じる寂寥感を

気のせいだと切つて捨てる、そんな日々。

——光陰はまさに矢の如し。まるで嘘みたいな速さで時間が過ぎていく。

そうして今は既に十二月の後半。ハンター試験の出発前夜。

イナギとビスケは街で買って来た高い酒を開け、2人でハンター試験合格の壮行会の名を借りた酒盛りをしていた。

——話は陽気に、酒は滑らかに、笑い声は朗らかに、酒盛りは続く。

ビスケのハンター試験徹底合格講座最終講義・「ビスケの一口アドバイス総集編」（第2項が「とりあえずぶつとばせ」な時点で真剣に聞くのをやめた。第1項「念能力をみだりに使つな」を聞いた時にまじめな話かと思ひ姿勢を正した純情を返して欲しい）や、ナビゲーターの場所を教えてくださいと願うイナギの懇願などハンター試験に関係のある物から、逆にまったく関係のない馬鹿話まで。

——四方山話は尽きることなく、積もる話に飽きることなく。

この数ヶ月で分かった事だが、楽しい時が過ぎていく速度はとてつもなく早い。当然この酒盛りも例外に漏れず、ふと気が付いた時には既にお開きの時間であつた。

そろそろ片付けなきゃならない。ビスケにその旨を告げてからイナギはゆつくりと立ち上がり、周囲に散乱している酒の空き瓶やつまみの包装紙などを次々とゴミ袋に放り込んでいく。

——周囲は闇。拓くは炎。遠くには月と星。聞こえるは木々の囁き。

「——ねえ」

1人静かに飲んでいたビスケの声が、後ろからイナギの耳へと入る。手を止めずに、声だけで尋ね返した。

「どうした？」

「私の指導、少しはためになった？」

「——らしくないな」

「……分かってはいるんだけどね。けど、アンタはアラマ師匠の忘れ形見。師匠に恩を返せなかった私は、彼の最期の頼みを聞く事では——アンタに修行をつける事でしか、恩を返せないのよ」

無言のイナギをよそに、ビスケは続ける。

「だから、聞きたいのよ。私の指導が役に立ったのか。……私がアラマ師匠の恩に、私が報えたのかどうか」

「……報えてる、間違いなくな。——だけど、アラマ爺が死んでいと決め付けるのは嘘だろう？ 考えても見る、あの元氣瀉刺な爺さんがそう簡単にくたばる筈ないさ」

「——簡単にはくたばらないでしょうね」

「だったら、生きていると思って動けばいい。死体が眼の前に出てきて、それが確実にあの爺のものだと分かるまではな」

それもそうねと、ビスケは苦い笑みを浮かべる。

「最も、俺は眼の前に死体があつたって死んでいるとは認めないがな。あの爺さんのことだ、死を超越して立って不思議じゃない。そうだろう？」

イナギが振り向くと何故かビスケは驚いていた。一拍置いて唐突に笑い出す彼女。

それがどこか楽しくて、気がついたらイナギも一緒になって笑っていた。

深夜、月光と眼の前の焚き火だけが唯一の光源である暗闇の中。響き渡るのはパチパチと木が爆ぜる音でもなく、梟の鳴き声でもなく、虫たちの合唱でもなく、木々のざわめきでもなく……。

静けさとは程遠い笑い声が、辺り一面を包み込んでいた。

▲

——心は、ひどく冷静だった。

2年前のあの日。イナギから話を聞いて直ぐに、私は優秀なハンターを雇ってライラの現地調査とアラマ師匠の安否確認をさせた。結果は……ある意味予想通りのものだった。

ライラを襲った相手はあの幻影旅団らしいとの事だった。全員が全員強力な念の使い手。あの師匠のことだからきつと大切な人を守ろうとするだろうし、残念な事に旅団の連中は片手間に相手をできるレベルではない。加えて年齢。いくらあのアラマ師匠と言えども、老いには勝てなかった。そういう事だ。

……アラマ師匠は既に亡くなっている可能性が高い。報告書はそう纏められていた。

それを知って、今、私はこうして笑っていた。

私が就いているのはとても難儀な職業だ。親しい者の死などそれほど珍しい事でもない。だからだろうか。その事実を眼前に突きつけられた私は、驚くほど素直にそれを受け入れた。

——同時に、知りたくなった。

今私の眼の前で笑っている弟子が、ハンターとして経験を積み、死に触れ、慣れて。大切な人の死を知らされたら、どのような反応を示すのか知りたくなったのだ。

ハンターとは、とても難儀な職業だ。

そしてその仕事を続けている私自身も相当難儀な人間なのだろう……人の死すら“知りたい”“掴みたい”というハントの対象にしてしまうのだから。

だから、今、私はこうして笑っていた。

静けさとは程遠い笑い声が、辺り一体を包み込んでいた。



荷物はとても少なかった。

必要最低限の衣服とサバイバル用七つ道具。財布とそこその額のお金。そして暇つぶし用の本を数冊。それらを皮製のボストンバッグに突っ込めば準備完了だ。

「ん、一応念を押しとくけど念能力は無闇矢鱈と使わないように」「基本使用禁止と自戒しとくから大丈夫だ。危なくなったら躊躇なく使うが」

その言葉に苦笑いしているビスケに対し、イナギは心の中で頭を下げる。

エルベガ行きの航空券を含めた会場までの移動費は勿論、試験の準備をするための金も貸してくれた。戸籍の事といい、修行をつけてくれたことといい、最後の最後まで本当に世話になりっぱなしだ。

ビスケに向けていた顔を上げ、グルリと周囲を見渡す。

思えば、この場所とも2年の付き合いだった。今振り返るとほんの刹那の事のように思えるが、これだけ長い間住んでいればこの場所や周囲の自然に愛着も沸く。日々の糧を恵み寝床を与えてくれたこの土地にも、イナギは心の中で礼を言った。

「とりあえず、どこへ行くかは決まってるんだっけ？」

「ああ。まずは近くの空港へ行つてエルベガに飛ぶ。後は野となれ山となれだ」

当然といえば当然なのだが、結局ナビゲーターは教えてもらえなかった。いや、何十年も前の事だからナビゲーター亡くなったと考えているのか、それとも単純に忘れてしまったのかもしれない。

——最後に当たりを一瞥し、グルリと体の向きを変える。
そのまま後ろへ片手を軽く挙げて、一言。

「さて、行ってきますか」

「うむ、行つて来い」

腰を手当て胸を張り。仁王立ちのビスケにそんな言葉で見送られて、イナギはゆっくりと歩を進める。

果たして走らなかったのは、単に日程的に幾分か余裕があったからなのか。それとも心の奥底でこの楽しかった日々に残る髪を引かれる思いがあったからなのか。

——けどそれでもいい。懐かしいと思ったなら、またここにくるとしよう。

結局イナギは後ろを振り返らずに、けれど1歩1歩確かめるようにして、その場所が見えなくなるまでゆっくりと歩いていった。

第四話 『ハンターの飾』（前書き）

閲覧くださり、本当にありがとうございます!!!
現在のPV2715、ユニーク501

ちなみに自分は犬派です。柴犬かわいいよ柴犬。

第四話 『ハンターの飾』

その惣菜屋は、とても大きかった。

主に搭乗時刻を待つたくさんの人が使う長方形の休憩室。その中ならどこからでも、通路を隔てて向こう側にあるその惣菜屋をガラス越しに見る事が出来るといえばその大きさが分かるだろう。

品数1つ取ってみても、そこんじよそこらの惣菜屋とは比べ物にならない。

例えば主菜だが、牛、豚、羊、鳥を始めとする肉類。イカ、エビ、蟹を含む魚介類。ジャガイモ、ホウレン草などの野菜類。……その各々が数種類のメニューを持っているのだ。そこに主食、副菜、汁物、飲み物、デザートが加わると言うのだからメニューの大きさは押して測るべし。

——そんな、広々とした通路に沿う様に居を構えているその店。そこに複数設置されたレジの内の1つ。中央付近のその前に、薄い新聞のような品書きを広げているイナギの姿があった。その目は猛禽類もかくやあらん、真剣という表現を軽く通り越してしまったような印象さえ受ける。

で、そんな彼が何をしているのかというと——

「……ラムチョップ、チーズサラダ、バゲット盛り合わせ、アップルパイ。あと特選サンドイッチ盛り合わせ。で、次のが——」

当たり前のように、惣菜を注文しているのだった。

「——以上だ」

「……余りに多いので復唱省略していいでしょうか？」

「間違えなければな。あ、頼んだ区切り事に箱分けしてくれ」

「——了解いたしました」

「で、急いであるから早く頼むな」

「少しばかりお待ちくださいませ！！」

ピクピクと頬を引きつらせながらレジ店員が注文を伝えに奥の方へと走っていった。店員としてその態度は正直アレだが、人としてならむしろ当然の物なので特に問題はない気がする。

……何故ならば、イナギが頼んだ惣菜は人数換算するなら軽く10人前を超える。もう普通にパーティーサイズであるのだが、何を思ったかイナギは始めに「スプーン、フォーク、ナイフは各1セットずつでいいから」と宣言していた。

その心は熱心なエコリスト……ではなくて、久しぶりに沸いた悪戯心のせいなのだが。

「お待たせしました。商品を詰めるのにかなり時間がかかりますので、15分位したらこれを持ってこのレジまで来てくださいね！

——17256ジェニーになります！」

そう言つて渡されたのは、「1」と刻まれたプラスチック製の番号札。脇に描かれている黒猫をデフォルメしたマスコットキャラクターが何故かくたびれている様に見えた。

「というかあの注文を全部暗記してたとは思わなかった」

「ありがとうございます！ 後ろのお客様がかなり支えているのでお退きになってくださいね！」

「……了解した」

困ると分かつててやったのかこの野郎という店員の視線に晒されて、支払いを終えたイナギは珍しくすごすごと引き下がる。さすがに少しやりすぎたかなと反省はしていたらしい。

……が、長い間待たされてこめかみに井形が出来そうな後ろの面

々は空気の如く無視である。ビスケが見たらアラマ症候群は順調に進行していると嘆き、また将来の自分を思つてマジ泣きするだろう。そうしてイナギは、実りの少ない森に住んでいる熊が如く殺氣立っている集団からひどくゆっくりとした足取りで遠ざかつていったのだった。

——ここは「デラシア国際空港」。この国最大の出入り口であり、平日休日問わずに人で溢れている騒がしい場所である。

それは今日とて変わらない。普段と同じか、それより少し多い程度の込み具合だ。

しかし、今日はいつもとは何かが違った。それは単純な人数の多少などではなく、言うなればそう、空港内の“空気”。常人とはまた違う陰呑な雰囲気を纏った、普通にカテゴライズされなさそうな人の多少。

そう、その理由は、間違いなくハンター試験だった。

より詳しく述べるなら、試験開始から丁度1週間前の今日に運行予定のエルベガ行きの便である。何故なら、これがハンター試験に間に合う唯一の便であるからだ。

この通常ダイヤとついでに常識を大幅にスルーした特別ダイヤにより、この地域に居る受験生が期せずして集う事に相成ったのだった。

「……本当に迷惑な話だ。周りの客に同情しなくなってくる」

自分もその1人である事は棚に上げて、イナギはその場に立ち止まり大きな溜息を吐く。その目線の先には――

「あの、本当にすいませ」

「ああ？ 謝っただけで許されると思うか！？」

「ヒッ、す、すいません、本当にすいませんでした」

「ゴメンで済んだら警察はいらないんだよ？ こっちは肩ぶつけら

れて病院行かなきゃならないわけ。いいからさっさと慰謝料出せよ」

健気に頭を下げている善良な利用者と、彼らに絡むハンター試験参加者と思しきチンピラが数名いた。

ハンター試験参加者の統計を取ると、このようなチンピラの数は意外と多い。その9割9分9厘が失格に……それもハンター試験会場どころか会場がある街にすら辿り着けないのだが、だからこそハンター試験の恐ろしさを理解できない彼らの参加率は年々増加傾向にある。

そしてそこで問題になるのは各地域住民の安全性である。彼ら独自の理論「なめられるな」を前面に出した結果、ハンター試験の緊張を孕んだ空気も相まって毎年のように問題を起こすのである。各地域の治安組織もこれにはほとほと手を焼いているらしい。

とは言えそんな事はイナギには関係ない。経験上あの手合いに関わると何かにつけて厄介ごとがやってくるので、無視するのが1番である。

そんな過去の教訓に従いその場を離れようとしたイナギだったが……彼らの言葉を耳にして立ち止まった時点で手遅れだったりした。

「なあ、兄ちゃん」

「……」

後ろからイナギの肩にポンと手が置かれる。振り払うようにして向き直ると、顔に無数の傷跡がある30くらいの男がいた。

「なあ、ちょっと“お願い”があるんだが、聞いてくれるよな？」

「1人でやってろ」

イナギは踵を返してその場を立ち去る。が、再び肩を掴まれた。それも今度は振りほどかれないようにかなりの力を込めてだ。

「兄ちゃん、受験生だよな？」

「……だとしたら、どうするんだ？」

「ああ、やっぱりな。そこいらにいる奴とは空気が違う。人を殺した事がある空気だ」

イナギの話を無視して男は続ける。肩の力はいよいよ強くなり、もう片方の手はポケットの横辺り。少し眺めのジャケットに隠れて見えないが、その感じから察するに、十中八九刃物の類を握っているに違いない。

通路の中央部で危ない空気を発して立ち止まる2人の側を周囲の人は避けるようにして立ち去っていき、人波の中に自然と虫食い穴が生まれた。

「いや、だからどうって話じゃねえんだ。ただな、俺が言いてえのは、兄ちゃんが持つてるエルベガ行きの手ケットを譲ってくれねえかって事さ」

「寝言は寝て言えよ」

「そんなつれねえ事言わずに、平和的に行こうぜ。何もただでよこせなんて言っちゃいない。売ってくれ。それで丸く収まるんだ。な？」

「断る。さつさと失せろ」

「——だつたらてめえが失せな！」

肩を掴んだまま、男の右手が奔った。案の定その手には刃渡り20cm程のナイフ。その速さ、正確さ、軌跡を見るにかなりの手練れである。その技量は彼が発する雰囲気にも十分見合うものだ。

——だが、イナギにとってそれは余りにも遅すぎた。

「——フッ」

息を軽く吐くと同時に肩の手を左掌で弾く。そのまま前方に移動し、引いた右拳を鳩尾に突き刺す。

それだけで男は気絶した。自らが振った腕の勢いにバランスを崩し、ドサツとその場に体を伏せる。

始め周囲の人々は「何やってんだこいつ？」と言いたげな目で彼を見ていたが、男は動く気配がない。さらにその傍らに抜き身のナイフが落ちているのを見つけ、ざわざわと人が集まる。それが喧騒へと変わるのにそう長い時間は必要でなかった。

近づいて容態を確認しようとする者。携帯電話で救急車を呼ぶ者。そして警備員を呼ぶ声が聞こえてきた時、既にイナギはその場からかなり離れた所にいた。

――歩きながら、ふと思い出したように腕の時計を確認する。時刻は9時10分過ぎ。

「ああ、もう15分経ったな。戻るか」

素直に弁当屋の側で待っていれば良かったなんて思いながら、プラスチックカードを手で遊びつつイナギはゆるゆると総菜屋へと戻っていくのだった。

かささぎの梯

第四話 『ハンターの篩』

受け取り自体は直ぐに終わった。対応に当たった例の店員の表情が「早くここから立ち去れ」とひたすら訴えていたので、よく分か

らない義務感から「やっぱりスプーン、フォーク、ナイフを個別につけてくれ」などと頼んだりもしたが、そうたいした問題ではない。――むしろ問題なのは、「大量の弁当が入った大きな袋は大きい」という純然たる事実だった。人が多い空港において大きな荷物は邪魔でしかない訳で、それを持ってうるつくのははっきり言って迷惑である。そして傍若無人な彼にも最低限の常識は一応残っていたらしい。

そこでイナギは荷物があっても比較的邪魔にならない場所――休憩室で搭乗時間を待つ事にした。

デラシア国際空港発エルベガ行きの飛行船の離陸は12時30分。搭乗開始は大抵その30分前なので、2時間半ほど時間がある事になる。だがこの飛行船に乗れないとイナギも困る訳で寝るのは我慢代わりに先ほど買った弁当をパクつきつつ持ってきた本を読みながら、長い待ち時間を潰していた。

そして、結果的にそれが幸いした。

離陸から大体2時間ほど前。イナギが休憩室の椅子2つを陣取ってから1時間ほど経過したその時、ピンポンパンポンというどこか間の抜けた電子音に続き、ある館内放送がイナギの耳に飛び込んできた。

「12:30発エルベガ方面行きの便の搭乗手続きを開始します。チケットを持っていらっしゃる方は、至急3番ゲートまでいらしてください。繰り返します――」

これは実質ハンター試験受験者の呼び出しに等しい。事実イナギがいた休憩室でも何となくアレな雰囲気を持つ人間が数十名、互いに牽制しながら順々に休憩室を出て行った。

「さて、と。俺も行くか」

それから5分ほど経って。

無駄であるかもしれないが、厄介事の種は少ない方がいい。放送を聞いてすぐに移動するのは「私受験生です。チケット持ってます」と他者に宣言しているような物だ。

既に他の受験生に絡まれていたイナギは、受験生らしき輩が休憩室から出たのを見計らってから開いていた本をパタンと閉じた。

——そうして、3番ゲート前。

厄介事は、到着した先で両手を広げて待ち構えていた。

「……なるほど、開始時刻を早める訳だな」

そしてありがとうビスケ、航空券手に入れてくれて。いやホントに。

苦虫を噛み潰したような顔とは裏腹に内心結構本気で感謝しながら、イナギはさもありませんと頷いた。

——そこは人、人、人の山。千じゃ足りない数の人が集まっていた。

や、一地方の受験生全てが集まっているのだからある意味正しい状況ではある。……そして騒動の原因も、一地方の受験生全てが集まっている事にあった。

空港会社がどれだけのチケットを発行したのか定かではないが、応募者が数百万人と言われるハンター試験である。それほど人が多くないこの地方とはいえ参加者は万を下らないだろう。その全員分の飛行船を用意することなど不可能だ。

だからといって「チケット取れませんでした。では諦めます」と物分りの良い人間がハンター試験に応募する筈も無く、それ以外の手段も全滅したチケット未取得の受験生が何とか乗り込もうと来ているのだ。

……つまるところ、先のイナギと同じ状況がこの場所で勃発していた。

空港側もその事態を考慮していたのか大量の警備員を配置していたが、ハンター受験生にとって民間警備会社の職員は絶対の抑止力にはなりえなかったようである。

しかし騒動を起こすのは総じて最初の節に落ちたような連中だ。ランクで言うなれば下の下。そんな輩が数に勝る警備員に勝てるはずも無く、騒動は自然と鎮静化していった。……少なくとも表面上は。

そんな状況を余所に、イナギは複数の搭乗ゲートで行われている身体・手荷物検査の様子を観察していた。

当然だが危険物の持ち込みは禁止である。何を血迷ったか堂々と刀剣類を持ち込もうとした1人の受験生が身を以ってその事実を改めて証明してくれた……百万分の一とも言われるハンター試験合格の可能性と引き換えに。

このように空港側の対応は厳格だった。高圧的ではないが、和を乱す奴には容赦がないといった感じだろうか。ハンター受験生（危険な連中）だからこそ、そこらの取り決めはより厳しく行われるようだ。

そんな様子を黙って眺めていたイナギは、ふとある事に気がついた。それは眼の前で当たり前の様に行われ、だからこそ直ぐに気づけなかった違和感。

「検査が、機械で行われていない？」

ゲート横に設置されている機械がまったく動いていないのだ。どういう訳か身体・手荷物検査は全て人の手で行われていた。

——もしかして機械が壊れたのか？……いや違う。質の高い警備員を大量に配置する程受験生を警戒している空港会社なら、仮に機械が壊れたならば修理するなり違うものを使うなりする筈だ。ならばこれは……

「――検査をしているというポーシング。そして選別の一環、なのか？」

余りにも無様な隠し方をする受験生の足切り。同時に「我々は危険物の持込、並びにそれが用いられるような状況を容認していない」と体的的に示す事により受験生の暴発を牽制し、仮に機内でそれらを使用するような事態が起こった際には「十分な検査は行った」「この責任は我々にはない」とアピールするための布石。

……流石は受験生を受け入れるような公共施設。いろいろと考えている。

イナギは航空会社の意図を把握すると共に、鞆に入ってる危険物をどうやって持ち込むか考えていた。

彼が持っている道具の中で危険物はサバイバル用七つ道具が一、折りたたみ式サバイバルナイフだ。そう大きくないので隠すのはさして難しくないが、かといって鞆の奥底に入れたくらいだと足切りされる可能性は高い。

兎に角どこに隠すにせよ、空港側の目が光っているこの場所で工作するのは得策ではない。人目を避けるべく、イナギは近くのトイレへつらつらと向かうのであった。



「では持っているお荷物、身につけている金属製品の類を出してください」

あれから1時間と少しが経過していた。

工作自体はそれほど時間がかからなかったが、イナギが休憩室を出て3番ゲートにやってきた時には既に順番を待つ列はかなりの長さになっていた。よって必然的にかなり後ろの方に並ぶ羽目になったのである。

「荷物はこのボストンバッグ。金属製品は腕時計と鍵、それにペンダントぐらいだ」

イナギの検査を担当するのは女性が1名に男性が2名。前者は作られた笑顔を顔中に貼り付け、後者は後ろでこちらを注視していた。そんな彼らの側にある金属製の机とプラスチック製の箱。そこにイナギはバッグを置き、身につけていた金属製品とついでにチケットを中に入れた。

「それではチケットと、搭乗するのに不適切な物がないか確認させていただきますますがよろしいでしょうか？」

「ああ。やってくれ」

その言葉を受けて男性のうち少し先が細い方が鞆の中身を確認し始め、女性はまずチケットの真贋を確認し、対衝撃を売りにした有名な時計、貸し金庫の鍵、そしてライラから持ち出せた数少ない物の1つである意匠の凝ったペンダントを手にとって眺めてから、イナギの胸やズボンのポケットの中身などを簡単に検査した。イナギとしても綺麗な女性にボディチェックされる事に関しては特に文句もないので黙って受け入れている。ちなみにその間もう1人の男はずっとイナギを注視し続けていた。

「……はい、問題ないですね。それでは案内に従ってお進み下さい」

ありがとうございました。そんな言葉と共に返してくる荷物を受け取って、手荷物は入れたり着けたり掛けたりしながら案内に沿って先へと進む。

かなりしっかりした作りの衝立で仕切られたロビーの中央に設置された入り口をくぐり、急造された白亜の通路を足音響かせ歩いて

いく。

——イナギがサバイバルナイフを隠した場所は、持って来た本の中であつた。文庫本の中身を折り畳んだサバイバルナイフの形にくり抜いてそこに納め、勝手に開かないよう他の本と一緒にロープで縛つたのである。

篩としての身体・手荷物検査はあくまで最低限の物でしかないだろうという予想通り検査はかなりなおざりであつたため、無事にパスできたとそういう訳だ。

捨てずに持ってきたくり抜き部分を使い何とか読めないかなどと真剣に悩みながら、一本道の通路を足早に行く。3度角を曲がり、4度目を曲がると直ぐに布で仕切られた出口があつた。躊躇わずにそれを潜る。

……イナギは少しだけ息を呑んだ。思わず慣れない口笛まで鳴らしてしまう。

そこは灰色の滑走路で、その上に飛行船が泊まっていた。しかも正面奥に1台。その少し手前、左右に2台ずつ。さらに手前に左右に分かれてもう2台。計5台もの飛行船が、五角形を形作るようにある。

そしてその中央には何やら巨大な硬貨が置かれていた。何かと少し近づく。周囲にはたくさんの受験生が集まっていたが、目が良いイナギはかなり離れた位置からでもそこに刻まれている文章をはつきりと読む事が出来た。

『15:00発エルベガ方面行きの便は人数の関係上5台で行います。順調に行けば到着は3日後の正午になります。それでは快適なフライトをお楽しみください』

ビスケの話によると、人的余裕の都合上ハンター試験には雇われの試験官——試験官がいて、何らかの形で受験生を篩にかけるといふ。

この場に集まっている受験生は1000〜1200人。単純に計算すると、飛行船1台に載るのは200〜250人。世界中の受験生がたった1つの街にやってくる事を考えると、この内の1つがエルベガに付くとしてもその人数は多すぎる。

つまり恐らくこの飛行船の内たった1機がエルベガに辿り着き、同時に飛行船の中でも何らかの試験があるのだろう。

——ビスケの修行を受けてきた彼から見ると、他の受験生のレベルは低すぎる。さらに“念”——戦闘における絶対的なアドバンテージの有無も相まって、少なからず気を緩めすぎていたのは否定できなかった。

事戦闘において遅れを取る気は毛頭ないが、これは試験であり決闘ではない。戦闘の強弱のみが合否の絶対的な基準ではないのだ。

……なるほど。強さに驕らず頭を働かせるとはこういう訳か。

「——ここでこけたら、話にならないからな」

ビスケの忠告を思い出し、改めてその事実に思い至り、気合を入れ直すイナギ。

離陸まで既に1時間を切っている。搭乗可能人数の上限が定まっている以上、どんなに遅くとも30分以内に乗り込まなければならぬだろう。

5機の飛行船の様子、他の受験生の動向、空港の職員の反応、受験生に対しての手がかり……。

正しい選択を行う為に、イナギは周囲を注意深く眺め続けた。



とはいってもイナギに飛行船の何たるかが分かる訳もなく、一応入り口脇に立っている女性全員に尋ねてみたが、にこにこ笑ってはぐらかされてしまった。

それならば飛行船の中——特に操縦室を見させてくれと頼んでみたのだが、答えはノー。1度乗り込んでしまったら、乗船機体の変更は不可能らしい。

よって何かヒントがないか大多数の受験生と同じく周囲をうろろしていたのだが、離陸30分前である12時丁度になった時、イナギは理性的な判断を諦めた。早めの後期乗船組として適当な機体に乗り込んだのだ。

選んだ機体はゲートと滑走路を繋ぐ通路の左。五角形の左下に位置するそれを選んだ理由は、早い話が勘である。判断基準が分からなかった以上仕方がないのだが、ちよつとばかり内心ドキドキであった。ちなみにこのイナギ、運はあまりよろしくない。

「チケットを拝見いたします……はい、相部屋ですね。何かご質問等はお有りになりますか？」

「特にないが」

「でしたらお部屋は109号室の4人部屋になります。防犯の問題上鍵は掛からない仕様になっておりますのでご注意ください。またお荷物を紛失された場合当社は一切の責任を負いかねますので、お荷物の管理はしっかりと行ってください。当機の備品を壊したり乗務員を傷つけるなど何らかの問題を起した場合お降りになって頂く事が御座いますので、気をつけてください。……それではこのフライトが貴方にとってよきものにならん事を。飛行船ゴーイング747へようこそ！」

まるで早口のようなのである。スチュワーデスはそう説明をすると、よく舌が回るものだと思な感心をしているイナギに一礼をして持ち場へと戻っていった。

「……とりあえず見て回るか」

マニュアルミスかそれとも人的都合上の問題なのか。機内設備についてはまったく触れていなかった事もあり、イナギはとりあえず機内を確認する事にした。構造の把握は緊急避難等には必須であり、また何かヒントが隠されているかもしれない。

そういう理由で機内を1周してみたが、特にめばしい事実は発見できなかった。機内の空気もピリピリしてはいるが小康状態を保っており、遭遇したハプニングといえば機体変更を要求する受験生と拒否するスチュワードの押し問答くらいの物だった。

ちなみにそれは受験生が無理やり外に出ようとした所を背後から来た別のスチュワードが拳銃の一撃を浴びせ昏倒させることで決着がついた。

「睡眠弾ですから心配はありません。どうぞ快適なフライトをおたのしみください。それでは」

とはそのスチュワードの言だが、それで不安にならない客はいない。めでたくお縄を頂戴する羽目になった受験生を見つめながら、イナギは空港側の強硬姿勢に溜息をついたのだった。

そうこうしている内に時間は過ぎ、出発時刻はやってくる。

各200名強の受験生を乗せた5台の飛行船は、ゴウンゴウンと低い音を響かせて大空へと舞い上がるのだった。



「ま、こんなものか。機内食としてはギリギリ及第点だな」

普通の食事としては落第もいい所だが。手持ちの弁当の残りや賞味期限を思い返しつつ、イナギはインスタントコーヒーを啜った。

ここは機内食堂。一応食事は出るのだが、250もの人間が1度に収容できる筈もなく。朝7時〜9時、昼12時〜2時、夕6時〜

8時という時間の間に勝手に来て勝手に受け取って勝手に食べというスタンスで運営されていた。

現在時刻は7時50分。ごみごみした場所での食事を好まないイナギはわざとギリギリまで待って食事に來たのだった。そのため今食堂に居る人間は数える程しかない。

「というわけでコーヒーのお代わりを頼む」

「コーヒーはセルフサービスとなっております」

「そうか。だったらコーヒー入ったポット持ってきてくれ」

「自分で歩いていってくださいませ！」

「……そうか」

何がというわけでなんだこの野郎と危ない目つきで睨んでくるホールスタッフに負けたのかどうかは知らないが、イナギはならお茶でいいやと各テーブルに1つ置かれているヤカンを手取る。

それなら始めから呼び止めんなとガラガラした目で語っているスタッフは、ピクピク頬を引きつらせつつイナギの前においてある空いた食器をやや乱暴に片付けていく。

——そう、彼女は何を隠そう例のレジ係である。あの総菜屋チエーンは空港が運営していて、手が空いている人はその間働く事が義務付けられているらしい。

果たして総菜屋の弁当より劣る機内食の原因は何なのかと思いを馳せるも、明確な答えは出ない。

「ま、ごちそうさん。なかなか美味かった——」

「……もしかして味音痴」

「9割世辞だが」

「ありがとうございますー！！」

どうやら総菜屋のレジ係兼空港職員も美味しくないと認識してい

るらしい。先程あまりに穿った考えだともいひしや総菜屋で弁当を買わせるためかなどという考えを切り捨てたのだが、案外それが答えなのかもしれない。

敏感に察知した背後からのきつつい視線に多大な悦楽を感じつつ、イナギは機内食堂を出る。その後向かうは109号室ではなく、飛行船の中央部分にある休憩スペース。

その理由はハンター試験参加者の男女比は圧倒的に前者が多い事にある。機内もそれは同じで、各客室も勿論そう。

……まあ何だ、109号室もその例に漏れず男の園なのである。むさ苦しい事この上なく、1時間中にいるだけでも嫌なのに誰がそんな所で寝られるかッ！とは他ならぬイナギの言。

その現実を認識すると直ぐに「1人部屋への移動は可能ですか？というかさせる頼むから」などと全身全霊を込めてスチュワーデスに頼み込んだが、答えはにつこりと笑つての「不許可です」だった。何やら個室は二等客室以上を予約したお客様に限るらしい。

その事実を知ったイナギは「やはり金持ちは俺の敵か」などと決意を新たにしていたが、金持ちを憎む王族というものもなかなかシチュールである。

とまあそんなこんなでやってきた休憩スペース。そこそこ広いその場所には、複数の高級そうなソファが設置されていた。

その内の端っこにあった1つを占領し、横になって手足を伸ばす。幸い辺りに人気はなくて邪魔される事もなさそうだ。寝るのにはもってこいの場所だった。

「さて、と。本でも読むかな」

腕時計をチラリと見ると、時刻は8時を少し回っている程度。周囲の明かりもまだ消える気配はないし、さすがにこの時間では寝られまい。

ボストンバッグのファスナーを開けて中から縛られた複数の本を

取り出す。それを器用に解いて1冊の本を選び出すと、不意の荷物検査の可能性を考慮して残りを縛り直して元に戻した。

——「必中！ 世界美味食材百選〜希少種編〜」。

分布場所に入手難易度、外見が似ている危険物、ライターの実体験、さらには現役ハンターのインタビュなど何気にディープな事まで触れられているその本は、今では料理マニアの入門書と言われるまでの地位を確立していた。

とはいえ出版社が数年前に倒産した事で現在は絶版になっている。そのため値段もそれ相応にするのだが、イナギはビスケの仕事に同行した際に古書店で見出し、店主と数時間に渡る交渉の末格安で譲ってもらっていた。

初日だからかそれともハンター試験だからか乗員は総じて静かであつて、パラパラと紙を捲る音と飛行船の放つ低く重い音がこの場を満たす。

そんな妙な心地良さに暫くの間身を任せる。自然に欠伸が漏れ出たまさにその時、館内放送を告げる電子音が機内に響き渡った。

『——9時になりましたので機内の照明を落とさせて頂きます。他のお客様のご迷惑になりますので、どうぞお静かにお願いします。それではおやすみなさいませ』

言葉が終わり、パツと周囲の明かりが消える。点いているのは最低限の誘導灯と、そして夜空に浮かぶ無数の星々だけだった。

「……明日に備えて寝るか」

それに眠くなつた事だし。というかいつも通りだけだな。その言葉は再び出てきた欠伸に変わる。

ボタンと閉じた本をボストンバッグに放り込む。ジッパーを閉め、鍵をかけ、それからソファの上に置き、枕代わりにして横になった。

両手を組んで、目を閉じる。深い眠気は直ぐにやってきた。

「体拭くのは、明日からでいい、な——」

空に行く船の中。変わらず続くその飛行音と、無数の星達の光に包まれて。

イナギはそのまま眠りについたのであった。



——何か嫌な感じがして、イナギは目を覚ました。

頭が未だ半分眠った状態なのは、差し迫った事態ではないという事。ボーっとした思考でそんな事を考えながら、何ともなしに立ち上がり吸い寄せられるように窓辺に近づく。

そこに広がるのは雲ひとつない空。清らかな月光と、陽気に輝く数多の星。

眼前に広がる幻想的な光景。止まらず続く不鮮明な違和感。

暫く眺め続けて、イナギはようやくその理由を見つけた。

原因は遙か遠く。空の彼方にポツンと見える小さな2粒の黒点…

…目を凝らすと一緒に発った飛行船だと辛うじて分かった。

急いで反対側に回り込み眺めると、果たしてそこにも同じような光景が広がっている。

——ここまで同じ進路をとり連なるようにして飛んでいた飛行船が、この夜半に突如として進行方向を変えたのだ。

……どうやらハンターの篩がついに始まったらしい。

ゴクリと、近くから生唾を飲み込んだ音が聞こえた気がした。

第五話 『雲の上の騒動』（前書き）

閲覧くださり、本当にありがとうございます!!!
現在のPV4459、ユニーク731

ギブミー感想

第五話 『雲の上の騒動』

翌朝。飛行船中央に位置する休憩スペースの後方部分。

8時過ぎまでずっと寝ているつもり INAギが目を覚ましたのは、やっぱりいつもと同じ午前5時だった。

修行とは、規則正しい生活から始まる。即ち、就寝9時。起床5時。

そんなビスケの言葉（と時々拳）に従った2年3ヶ月に渡る営みは、どうやら INAギの身体に早寝早起きをよほど深く刻み付けていたらしい。頭は瞬時に覚醒する。目が冴えてしまつて二度寝も出来そうにない。

——仕方がない。素直に起きよう。

そう決めて体を起こし、大きく伸びをする。全身が小気味良い音を立てた。

「ふう。顔洗うか」

肩をトントンやりながら、昨日見た機内案内表を思い出す。一番近い手洗いは……確か少し行った所の階段を上った先にあつた筈だ。清潔感溢れる白色の廊下を音を立てながら歩く。規則的にカツカツと響くスタツカートと、飛行船の低い稼動音の二重奏。誰も居ないこの空間をただそれだけが満たしている。

突如、眩しさを感じて INAギの足がピタリと止まった。

その場でゆっくり首を動かすと、あるのは大きめの四角いガラス窓。その透明な隔てのさらに向こうに広がっている、赤く優しく雄大な光景。

霞みがかかる遙か水平線を切り裂いて、その御姿を呈したのは――

「……壮大、だな」

——始めて上空から見た、出でゆく巨大な日輪であった。

かささぎの梯

第五話 『雲の上の騒動』

……しかしまあ、無常で無慈悲なのが現実な訳で。つまるところ、そんないい気分も、あれから5分と立たずに崩れ落ちた訳で。

「だからさ、俺たちはこれはどういう事なんだって聞いてるんだけどな」

「ですから、その件に関してはこれ以上申し上げられません」

たいそう気持ちよく身だしなみを整え終えたイナギを待ち受けていたのは、思わず目を背けたくなるような言い争いであった。

「先程も申しましたように、当機を含めた5台の運行情報をお知らせする事が出来ないのです。どうかお騒ぎになられぬよう、よろしくお願いいたします」

その騒ぎの中心に位置するのは、笑顔を顔中に貼り付けたスチュワード。しかしその目は笑っておらず、感情の色さえあまり見えない。これ以上ない業務用の笑みだった。

「なあ、あんまり俺たちを舐めんなよ？　いつまでも下手に出ているとは限らないんだぜ」

一方そう返すのは、顎鬚が無駄に雄雄しい壮年の男。そしてその周囲で殺伐とした雰囲気を放ち、無言で賛同の意を示す複数の男たち。——即ち、ハンター受験候補生とでも言うべき面々である。

「俺たちが何を目指してるのかは当然知ってるだろ？ ……な、怪我したくなけりゃさっさと見えよ」

「申し訳ありません。社の決定ですのでお伝え出来ません」

「……ンの野郎、いい加減にしとけよ」

「申し訳ございません」

「いいからどういふことが教えろつつてんだよ！！」

「申し訳ございません」

「ふざけんじゃねえぞオラ！！」

お前こそふざけんよ！ いつまでも通路塞いでんじゃねえ！
そんな騒動の中心から離れる事約5メートル。足止めに加え下らない言い争いを聞かされて、イナギが思わず叫びかけたまさにその瞬間。

その場にいた全員の耳に飛び込んできたのは、この場にまるで似つかわしくない穏やかな女性の声だった。

「まあまあ、皆さん一旦落ち着いてください。……乗務員さんも謝ってばかりじゃ伝わらないですよ」

イナギを含めた数多くの視線にパチリとウイंकを返したその声の主は、イナギの真横に立っている若いシスターだった。

身長は160ちよつと。スラリとした体型で、年は恐らく二十代前後。紺色の楚々とした修道服に身を包んで尚その美しさは褪せることなく、むしろ清楚な美しさをこの上なく醸し出している。

日の光に煌く山吹色の髪は、まるで深い秋をその身に宿したイチ

ヨウの葉の様。細く、そして艶やかなそれは、結って後ろで纏められている。

大きな瞳は淡いコバルトブルー。太陽の光をキラキラと反射する海のようなそれが2つ、まるで白絹のような決め細やかさを持つ肌の上で煌々と輝いている。

加えてその清らかな佇まい。優しさが形を持ったような錯覚を覚える眼。その全てを受け入れるような微笑。それらを併せ持った彼女はどこからどう見ても神々の僕であり、誰もが想像する清らかな乙女そのものだった。

「……おいおい、シスターさんよ。俺たちは今この人とお話してるんだ。部外者が横から口を挟まないでくれよ」

何故シスターがこんな所に？ そんな疑問を押し殺して、中心に居た男が聞き返す。その口調は先程よりも幾分か柔らかいが、それでも懇切丁寧にという訳ではない。少し聡い者が聞けば関わるのを止めようと思う程度には暴力的な空気を含んでいる。

……が、今回に限って言えば相手が悪い。正直言って役者が違った。

男の言葉に怯むことなく、どころかにつこりとした笑みを浮かべて彼女は口を開く。

「いえ、言わせてくださいな。だってそんな恐ろしい話し方では話せるものも話せなくなってしまうます。あなたが自分でおっしゃったとおり、あなた方はハンター受験生なんですから。凄んでしまっ

ては一般人の方が萎縮してしまうのは当然です。それに……」

「……何だ？」

「本当は、私も怖いんです。お願いですから落ち着いてください」

ね？ とまるで太陽のような笑顔で微笑まれ、毒を抜かれる男。

それは周りの受験生も同様で、黙って会話を聞いていたスチュワードですら同じであった。頑ななまでに張り付いていた薄ら寒い笑顔がいつの間にか消えている。

——ああ、さすがはシスター。人が出来ている、うん、こんな所でたむろっていた男どもとは人の器が違うよ、器が。

この時、イナギは心の底からそう思った。交通の邪魔をされたり突然切り付けられたりと今の今までひどい目にしかあってなかっただけに、彼女への思いは正に地獄の仏、救いの中の救いであった。

「それで、皆さんは集まって何をしていたんです？」

「ああ……、ちよつと気になる事があってな。だからその搭乗員に尋ねていた訳だが、答えてくれなくてつい、な」

……が。よく考えれば、飛行船の乗務員を除けばここに居るのは全員がハンター受験者である訳で。そしてハンター受験者に単なるシスター（いい人）が参加している筈もない訳で。

「なるほど。それでその気になる事とは？」

「外を見りやすく分かる事だけだな。一緒に出発した他の飛行船が何故か居なくなってるんだよ」

「——何だ、その程度のことで大騒ぎしてたんですか。てつきりどんな大事件が起こったかと思って来てみればその程度……ああ、あなた方は所詮ハンター受験生ですらないんでしたね。本試験参加すらままならない低脳に期待するには酷な事でしたね、ごめんなさい」

ハ？ と思う暇もなかった。頭がその言葉を認識する前に、組んでいた腕の袖がグイッと引かれる。隣を見上げれば、やっぱり太陽のように晒っているシスターが1人――

「と、こちらのお兄さんがおっしゃっています」
「スケープゴート!?」

「つーかむしろトドメかよ!

心中叫ぶイナギの服の袖を、逃亡を阻止する為ガツチリと握った
ままのシスター。

——その胸の前で、鈍く光る銀色の十字架が小さな音を立てながら揺れていた。



「まったく……ここは地獄かよ」

「む、我等が聖典から言葉を引用しておきながらその言い草……喧嘩を売られたと解釈してよろしいですか？」

「むしろ俺だよな! つーかまったくの濡れ衣だよな!!」

「——ああ、あなたの服の袖が濡れているだけに、ですか」

「思いつきり絞りたいくらいにな!!」

手洗った時に濡れただけで、まったく意識してなかったけど!!

「……微妙に上手くて何か悔しいです」

「——理不尽だな、オイ」

ちよつとだけ昔（アラマ爺）を思い出したりした。今なら他人に少し優しくなれる気がする。ただし3秒で忘れる。

そんな会話を何となくしてはいるものの、その眼の前には——

「……テメェら、よくもふざけた事抜かしてくれたな」

シスターの言った事によやく追いついた男達がいた。大半は怒

り心頭だが、その中には未だ困惑した表情の者すらいる。うん、理解が遅かったり未だ理解できていないその気持ちはよく分かる。俺も当事者じゃなかったらそっち側に回って、理解できないままこの場を離れたいくらいだ。

だからイナギは何とかその旨を伝え、自分には厄介事を起こす気がない事を、というか自分は（内心は兎も角として）無関係だという事をアピールしてみる。

「いや、そもそも俺は何も言ってな」

「このクソ野郎が！　ぶっ飛びやがれ！！」

……けど、やっぱり状況が許してくれそうになかった。

そう言っただけで殴りかかってきたのは、帽子を被った少し細身の男。その体捌きから見ると本来の獲物は大きな目のナイフか。抜いていないという事は殺すつもりではないのだろうが、如何せん時と場合が悪かった。

彼の行動を契機として一斉に動き出す受験生達。中には得物を抜こうとする馬鹿までいる。……その場から1歩引いて、安全を確保し事の成り行きを見守る彼、スチュワード。

「おい、この船のマニュアルどうなってんだよ」

「はい、マニュアルでは身を挺してでもお客様をお守りする事になっております」

再び復活した例の笑顔で、何のためらいもなく流れるように答えられる。一瞬自分が間違った事を言っているのだろうかと考えてしまった。

「……理解してるならいい」

「ありがとうございます」

——駄目だコイツ、まったく当てに何ねえ。

そんな事をしている内にも、前から横から後ろから、無駄な筋肉ついてたり微妙に素早かったりちよつと頭を使ってみたりする、大小の様々な男達が、ひたすら突っかかってきて……

「ってあーもう、うつとうしい！」

兎に角こいつ等の動きを止めればどうにかなるだろ。機内規定？喧嘩両成敗？ 知らん！ 放っておく会社が悪い！！

そう結論付け、避ける事を止め、イナギは丁度突っかかってきた男の顎下に一撃を加えようとした。

その時だ。今まで風の影響による揺れが殆ど感じられない安全な飛行をしていた飛行船が、突如揺れた。しかも普通では考えられない程、左右に激しく。

その揺れに合わせて受験生が辺りを飛ぶ。何かに足をとられて転んだり、壁に頭をぶついたり、他の受験生に跳ね飛ばされたり下敷きになっていたり。周囲は一気に阿鼻叫喚の巷と化す。

そんな状況が数十秒続いた後、揺れは始まった時と同じく突然止まった。まるで朝風のような静けさの中、館内放送用のスピーカーの電源が入る。

耳を劈くような不快さを伴う電信音の後、硬直したままの受験生の耳に入ってきたのは少ししわがれた、しかし力強い男性の声だった。

「あー、3階右側の階段付近の通路、並びに203、306の部屋の中で馬鹿をしてたりしようとしているお客様にお知らせいたします。当機内における暴力行為は、その善悪を問わず一切禁止されております。どうかご理解とご協力をよろしくお願いいたします」

うめき声を上げていたり喚いていたりする輩がいるせいもあつて大層聞き取りにくかったが、その口調と声質から判断するとそこそこの年齢に達しているものと思われる。恐らく50代の半ばくらいだろう。

館内の反応を窺がうような沈黙が暫し流れた後、声の主は重ねて口を開いた。

「えー、それでは次の話に移ります。既にお気づきになり疑問を抱いている方々もいらっしゃるでしょうが、当機は共に飛び立ちました4台の飛行船と今から3時間半程前に別れ、それぞれ異なった進路を飛行中でございます。尚、今後この機を含めた飛行船の運行情報にお答えする事はできませんので、どうかご了承下さい」

その言葉に答える声はない。身じろぎするものすらおらず、いっそ不気味な程静まり返っている機内。この放送を聞いている受験生の瞳の中に剣呑な気配が宿りつつあった。

その空気を読んでいるのかいないのか、絶妙と思われるタイミングでまた声が流れ始める。

「——当機は“エルベガ方面”行きの飛行船です。“エルベガ行き”の飛行船ではございません。加えて、“順調に行けば”“エルベガ方面への”到着は2日後の正午になります。どうかその事お忘れなきよう、よろしく願います。以上、飛行船ゴイング747号機長クガジでした」

そう最後に告げ、スピーカーの電源が切れる。広がった沈黙。まるでそれを壊すのを避けるかのように、様々な思惑を抱えた受験生たちはその場を1人また1人と離れていく。

そうして、まるで示し合わせたかのような、一連の騒動が嘘のような静けさが機内に訪れた。……嵐の訪れを予感させるような静け

さであつた。

——ちなみに。

この放送から約30分後。飛行船の至る所に次のような張り紙が掲示される事となる。

「当機に搭乗して発生するお客様同士の不利益について、当社は一切の責任を負いません。また当機の乗組員並びにその所有物に直接間接を含め危害を加える事になった場合、それ相応の措置を取らせていただきますので、理性的な判断をよろしくお願いいたします」

▲

四角い窓から差し込む陽の光が清々しい、穏やかな雰囲気の内食堂である。

先の出来事の影響だろうか、まだほとんど人はいないその一角にイナギの姿があつた。

陽光が映え、かつ清潔感漂う水色のテーブルクロス。随所に配置された、瑞々しさを振り撒く観葉植物。

食事の出来は相変わらずだったが、諸々のインテリアや流れる音楽センスを含めた食堂の空気は及第点を与えられそうだ。そんな詮無い事を頭の中で考えながら、イナギは少し離れた所をかなり足早に通りがかったホールスタッフに声を掛けた。

「今朝の気分はアイスカフェオレなんだが。物凄く冷たい奴」

「残念ながら当機にはホットコーヒーしかございません」

「知ってる。だから今こうして熱いのを飲んでる訳だが」

「……そうですか」

例によって、例の彼女であつた。もはや完全に顔と存在を記憶したらしく、イナギ付近の仕事はもう1人のスタッフに任せる事にし

たらしい。しかし、相手は人をからかう事に人生の2/3を費やしたといつても過言ではない人物の弟子である。

そこはそう上手く行くはずもなく、少し近くに寄った所を容赦なく捕まええられてしまった。

「という訳で、氷とスティックシュガーとミルク持ってきてくれ」

「ですから当機はセルフサービスに――」

「了解分かった本当に厨房に入っていていいん」

「――運んで参りますので少しお待ちください」

「ん。全部大目にな」

「……了解しました」

「それとグラスも一緒をお願いします。とういかアイスコーヒー作ってきてくれ」

「……了解、しました」

うむ、この会社はよく教育が出来ているなあ。今度株買ってやろう、金が出来たらだけど。

イナギは目を細め、満足げに頷いた。個人の人格が優れていると考えない辺りがもはやアレである。既に他人いじりはデフォルトの域まで達していた。

一方目元が見えない程俯いてプルプルと震えている彼女は、少しふらついた足取りで同僚に近づき少しの間1人で応対してくれるようお願いする。ちょっと本気で心配されて人間の暖かさに改めて気づいたりしていた。うん、私まだ頑張れる。

――そんな事があつたりして、現在7時30分。

あれからホットコーヒーとアイスコーヒーを計3杯飲み終えたイナギは、そろそろ席を立とうとしていた。その理由は食堂が次第に混み始めたからでもあるし、アイスコーヒーが手に入らなくなったからでもある。アイスコーヒーがない食後の一服など価値がないのだ。空になった2つのグラスとカップを重ね、プラスチック製のプレ

ートの上に置く。それを両手に持ち立ち上がるうとした所で、イナギが座っていた席のイスに誰かが座った。

混み始めたとはいっても満席にはまだ遠く、事実隣の席はまだ誰も座っていない。不審に思い顔を上げる。

「どうも、さつきはありがとうございました」

……うん、俺は何も見なかった。

「——さて、片付け片付けと」

「って、ちょっと待ってください！ 話があるんです！！」

そう言われ、イナギは渋々と浮かした腰を下ろす。……目の前にいたのは、先の騒動の原因となったシスター；疫病神であった。

「で、用は何だ？ 俺は今非常に忙しいんだが」

「ぜんっぜん忙しそうに見えないですよね！！ ……まあいいです。要件は、お礼です」

「お礼？」

「はい。先程の事についてです」

「いや、何に対してかの疑問じゃなくて……お礼？」

お礼参り——はむしろ俺がする方だろうし。謝罪の間違いじゃね？

「はい、お礼です。私を庇ってくれた先程の件に関してのお礼です」

——あれ？ 俺って庇ったわけ？

イナギは首を捻りながら思い返してみる。が、何度考えてみても生贄にされたという事実しかヒットしなかった。善意の犠牲者など

では決してなく、紛う事なき被害者である。

「……用件はそれだけか？」

だったらもういいな。少し怒気を孕ませ話を切り上げようとするイナギだが、相手はそう易々と席を立たせようとはしなかった。

「いえ、本題は別にあります」

「本題？」

「はい。相談事、です——企み事の」

周囲に聞こえない様にそう囁くシスター。その雰囲気は先程までのほんわかとしたそれとは一変し、一気に硬質化した。

真っ直ぐ見つめてくる双眸を真正面から受け止めて、イナギは短く聞き返す。

「企み事？」

「はい。企み事です。——この飛行船に乗ってる受験生、一緒に追い出してやりませんか？」

まるでイナギの反応を確かめるようにゆっくりと、しかしはつきりとした口調でシスターが切り出したのは、そんな提案だった。

▲

ほぼ席が埋まった機内食堂。静けさはとうの昔に消えうせていて、食器が触れ合う不快な音や判然としない小さな話し声、複数が周囲を歩き回る音といった雑音に溢れているその場所。

しかし、イナギにとって周囲の喧騒はどこか遠かった。

「――さて、どうでしょう？」

ほんの数秒の間。僅かな時間を空けて、満ちている音に紛れ込ませるように答えを促すシスター。

まるで畳み掛けるようなそれに対し、イナギは答えず沈黙を保った。

――応募者数百万人とまで言われるハンター試験である。その内数百人を蹴落とした所で果たして大勢に影響などあるだろうか。それにより自分が有利になる事などありえるだろうか。

……否、答えは否だ。イナギは即座に否定した。そもそも試験会場に辿りつく倍率は1万人に1人。空港に集まった受験生の中から1人出るか出ないかといった倍率である。放っておいても受験生は流れるようにふるい落とされていくだろう。

むしろ自分がふるい落とされない事こそを心配するべきである。

他人に構っている輩など、道連れにして双方失格が関の山だ。

イナギが考えるのを止めて頭を上げたのは、それから数十秒を経たからだ。その間ずっと見つめていたシスターの顔を正面から見てはつきりと答える。

「断る」

「どうしてですか？」

「リスクに見合うメリットが見当たらないだろう。そんな事してたら足元掬われる。それに……」

「――何だ、気づいてなかったんですか」

俺にはお前を信用して組む理由がない。そう続けようとしたイナギだが、眼の前の彼女はさもビックリしたような、ともしれば大げさ過ぎる様子で声を上げた。今までの囁くようなそれとは違う、よく通る甲高い声だった。

その声に反応して周辺の視線が2人に集まる。一瞬静寂を取り戻

した食堂内に、シスターの声が響く。

「この船がエルベガに着く訳ないじゃないですか。ハンター受験者の総数と一次会場に到着する人数を考えれば分かる事です。だから早く降りて別のルートから行きましょ——って待ってくださいよ！
」

彼女の言葉が進むにつれ、辺りの顔色が変わった。納得、驚愕、疑惑、深刻。そして思考、行動。その様子を見る限り、少なくともこの場の面々の心境がこの飛行船からの脱出に傾いた事は疑う余地がなかった。

彼女の提案とこの行動がどう繋がるかは未だおぼろげであるが、一連の騒動を見ればこれだけははっきりしていた。——俺は彼女の企ての片棒を担がされた、意図せずして利用されたのだと。

理解すると同時にイナギは憤然として立ち上がる。早朝のような展開ならまだいい。通路を塞いでいる奴らには自分も腹が立っていたし、襲われそうになっている女性を助けるボランティアをしたと思えばむかつ腹もそう立たない。

だが、今のは別だ。俺はコイツに利用された。純然たる事実として、俺は「出し」にされたのだ。誰かを利用するのは大好きだが、されるのは腹に据えかねた。

その後を軽快に追ってくるシスターだが、イナギは気にかける事すらしない。ただ前方を睨みつけたまま、駆ける様に行く。

そうして食堂を出て、通路を進み、階段を登り、広い休憩スペースに着いた所でピタツと止まった。クルリと振り返った先には、息1つ乱さずニコニコと笑う修道女。

「ンだよ、さつさと消えろ」

「そうはいきません、お話の続きがあるんです」

「……ホントいい加減にしろよ。これ以上付きまとうな」

この上関わってくるなら容赦はしない。その怒りを隠す事無く、イナギは殺意を混めて睨みつけた。

その視線の鋭さにシスターの頬が引き攣る。引けそうになる腰。後退りかける両足。身構えそうになる身体。震えそうになる喉。けれどその全てを何とか封じ込め、手で心臓を押さえつけながら声を投げかける。

「分かりました。5分だけお願いします。そうすれば、2度と、あなたの側に近づきません」

「――5分だけだ。破ったら手足の1本は消えるぞ」

「……約束、します」

まったく、自分も大概人が好いな。……ま、こんだけ脅せば2度と近づかないだろ、後5分だけの我慢だ。

イナギは自身の性格に呆れながらも、張り詰めていた空気をフツと解いた。両手を広げ無害をアピールしつつ、警戒しているシスターに1歩近づく。

「だったら早く済ましちまおう。場所はここでもいいのか？」

「……いえ、聞かれない所の方がいいですね。着いて来てください」

肩を竦める事で了承の意を示し、イナギはソファの後ろに隠しておいたボストンバッグを引っ張り出す。それが誰にも空けられていない事を確認してから、既に背を向けているシスターの後をゆるゆると追うのだった。

微かな筋肉の動きや視線の運び具合、そして咄嗟に下がろうとした事。それらを考慮すると、彼女は中、遠距離からの戦闘を得意とするのだろうか。そんなとりとめもない事を考えながら。



脇目も振らずに歩くシスターが向かったのは、最上階にある客室であつた。彼女の言によると自室であるとの事らしい。

同室の受験生がいる部屋では隠すことなど不可能ではないのか。というかあんな所よく入れるな。説明を受けたイナギは真剣に首を捻つたが、その疑問は入り口を潜つた瞬間に氷解した。

——なるほど、やはりこいつ（ブルジョア）は俺の敵か。

イナギの眼の間に広がるのは、二段ベッド2つと荷物用のスペースしかないゴミ溜めなどではない。広く豪華な客室であつた。

飛行船内のため調度品は少ないが、全てが高価なアンティークであり。……何より、ベッドが1つしかなかった。それも二段ベッドではなく、クイーンサイズの特注品。

魂の慟哭がイナギの全身から迸つた。それは嵐の夜の幾万の雷の様に次々と落ち、浅黒い地面に吸い込まれては消える。その場に残るのは壊滅した残骸のみ。単なる逆恨みである。

そうして「二等客室以上を予約したお客様（イナギの前にいるシスター）」は、何故が強まった後ろの視線への反応を抑えるのにまた全力を尽くすのであつた。彼女にまったく非がない辺り理不尽の極みである。

「それで、話つてのは？」

「……機内の受験生についてです。可哀そうだとは思いませんか？ あの人たち、このまま試験を続ければ間違いなく全員死にますよ？」

予選とはいえハンター試験の一部。本選には及びもつかないとはいえ、死の危険は確実に存在する。それだつたらここで失格になつた方があの方達のためになる……。

イナギの問いに対し、シスターは天使のような笑顔でそんな薄ら

寒いセリフを並べ立てる。

「それが。提案の理由か」

「はい。だって私、シスターですから」

彼女の答えが静かな唄に混ざって流れる。入って直ぐに点けたらしい部屋付のラジオが、裏切りを誇るラヴソングを奏でていた。

「その理由を聞いて、はつきりした」

「だったら——」

「ああ、ますます遠慮するよ。願い下げだ」

他人への優しさは嫌いじゃない。が、俺はそんなセリフを笑って言う輩と組む気はない。言外にそう告げてイナギは背を向ける。

——が、背中越しに聞こえてきたのは、予想していた落胆の溜息でも引き止める懇願でもなく。

飛んできたのはどこか残念そうな、それでいて何となく嬉しそうな、加えて漸く納得したような複雑な独唱。

「……あーあ、雰囲気からしててつきり複数回の参加者だと思ってただけ、本当に初受験者だったんだ」

まったく予想していなかった反応に、イナギは振り向いてまじまじとその顔を見つめる。

——そこには笑いが浮かんでいた。だが先程のある意味人間らしくない微笑とは違う。チエシャ猫のような、鮮やかな生々しさ溢れるニヤリとした苦笑이었다。

……ああ、なるほど。

「そっちが地か」

「そーよ、正解。あー、演技でもあんな薄ら寒い事言つべきじゃないわね。鳥肌たったわ」

見てよこれ！　なんて言つてシスターは腕をまくり見せてくる。別に見たくはないが、チラリと見たそこには確かに無数のぶつぶが出来ていた。

「ま、全部が全部丸っきりの嘘つて訳じゃないけど……。しかし、あなたどうしてそんなに落ち着いてんのよ」

頭の神経どつかやられてんじゃないの？　なんて面と向かつて嘲ってくる。さっきまでとキャラが変わり過ぎである。

「落ち着いてちや悪いのか？」

「悪いっていうか、普通じゃないわね。だって、あんたもエルベガに到着するか否かは運次第だって思ってるんでしょ？　他の受験生みたく、正解は1/5だって勝手に決め付けて。それと仮にこの機が正解だった場合、機内で何らかの試練があるって思ってる口ね」

頭はそこそこ回るけど、経験が足りないタイプ。積んで変わるかはお楽しみってところかしら。そんな毒舌に反応する事なく、イナギはただ呆然としていた。思考を次々当てられて、コイツもしや念マスターしてるんじゃない？　みたいな疑問も浮かんでくる。精孔閉じてるから有り得ないんだけど。

そんな彼を放っておいて、彼女の話はいけいけゴーゴー。ひたすら一路邁進する。

「5台の飛行船が全てエルベガに着く筈がない。イコール、自分が乗っている飛行船はエルベガに着かないかもしれない。その事すら分からないのは至上の馬鹿だけ。普通の馬鹿でもここまでは考えら

れる。問題はそこからどう進むか」

そこで間を空けて、チラリと前を見る。……イナギはようやくと現実に復帰し何とか話についてきている所だった。

少し呆れた様に両肩を上げ、重ねて言葉を紡ぐ。

「つまりね、他の受験生はこの飛行船がエルベガに着かない事をどうしようもなく心配しているの。中には心配すぎてハイジャックを企てる奴もいる。釘刺されたのにね、ホント馬鹿ばっかよ。――一方あんた。別に至上の馬鹿って訳でもなさそうだし、かといって気づいてる訳でもない。何でそんなに平然としてるのよ」

「性格だろ。それよりも、さっきから気づいてるって何をだよ」

「……張り出された掲示は見たの？」

両腕を組み、人差し指を空に向け。何となく教師を彷彿とさせる仕草をしながら、彼女は疑問に疑問を返した。
釈然としない面持ちながらも、頷いて返す。

「その中で違和感を感じた部分はなかった？」

「……ちよつと待て。今思い出すから」

「何よ、もしかして神経衰弱弱い人？ ヒント必要？」

うるせえよ。大きなお世話だ。イナギは内心でそう毒づく。

ちなみに神経衰弱は別に弱く無いが、念の修行と称して数日間に渡り不眠不休で強要されたため半ば鬼門と化している。何故って念の使用禁止。念を使わずにどうやって念を鍛えるのだろうと思っていたら、ただの悪戯であつた。

それはさておき。

「……そうだな、あえて言うなら、「お客様同士の不利益」の辺りかな」

——当機に搭乗して発生するお客様同士の不利益について当社は一切の責任を負いません。また当機の乗組員並びにその所有物に直接間接を含め危害を加える事になった場合それ相応の措置を取らせていただきますので、理性的な判断をよろしくお願いいたします。何とか頭の中で文面を思い出し、初見時の感想を思い出す。すると浮かんできたのがその下りだった。

何故ならその文だと『「お客様同士の不利益」』『「受験生間のトラブル」の責任を航空会社は負いませんよ』というごく当然の事を告げているだけであつて、「飛行船に搭乗している事によつて発生する、お客様の不利益」』『「飛行船がエルベガに着かない事で発生する、受験生の不利益」』に関しては触れていないからだ。

普通明記するならば、『「後者」の責任を航空会社は負いませんよ』だろう。しかし所詮その程度、よくあるミスの類だろうと思つて流していたのだが……

「That's right!（その通り!）」

シスターはパンツと指を弾いて首肯した。

「なーによ、気づいてんじゃない! それがまんま答えなのよ——この飛行船が間違いなくエルベガに着くつていうね」

「……何だつて?」

「何なのよ。もしかしてまだ分かつてない?」

「悪かったな」

「あーもー拗ねるな! そこが気になつたつて事はもう答えが出たも同じじゃない。考えてもみなさい、あの文面だとエルベガ方面に到着しなかった場合契約不履行の責任を航空会社が持つ事になるでしょ。だって私達はエルベガに着く飛行船のチケットをお金を代価にして買った。そして向こうが売った以上、航空会社は購入者をエ

ルベガまで連れて行く義務があるのよ。それも不利益が生じないよう……つまりハンター試験に間に合うように、ね」

どう、簡単なことでしょ？ シスターのちょつと得意そうな顔が、イナギには非常に腹立たしかった。

「確かに、言ってることに矛盾はないな。――だが、」

当たり前じゃない。そんな眼前の彼女の台詞を遮って、イナギは強引に続けた。

「仮に合っていたとして。俺がお前と組む理由にはならないよな」
「それでも私、本選に3度出場した事あるのよ。その経験の有用さは今示してるのにも関わらず？」

確かにそのノウハウは非常に魅力的である。しかし、逆に彼女が俺と組みたがる理由が分からない。

一方的な供与により生まれるのは協力者などではなく、庇護か利用のどちらかであり。彼女は使い勝手の良い駒を求めているのかもしれないが、それなら俺の方から願い下げであった。

しかし俺の返事を聞こうとはせず、彼女は人差し指を軽く立てて教師のように呆れてみせる。

「いい？ そもそもね、本選はともかく予選なんてそう難しいもんじゃないの。ちょつとした頭遊びと発想の転換。そして最低限の身体能力。後は傾向さえ知っていればどうって事ないわ」

その傾向を知る事が出来ないから新人は本会場にたどり着く事さえ難しく、下手したら死ぬ事になるの。第一種接近遭遇時との印象がガラリと変わったその修道女は、言い含めるようにそう締めくく

った。

彼女曰く、2回目までに本選参加すら果たせない人は一生合格なんて不可能らしい。

「ここまでを踏まえて、改めて聞くわ」

地面より遥か高くを流れるように進む飛行船である。平生光を遮る広大な雲は眼下に広がり、斜めからの日差しを遮るものは何もない。

少し強すぎる陽光が、窓を通して突き刺さる。

「——彼らが脱落するの、ちょっとだけ早くしてやらない？」

真実この飛行船がエルベガ方面に到着するならば、やっぱり俺が態々動く必要はない……何を言う、死ぬ可能性の高い彼らの事を考えてだな……それは単なる偽善で、生きるも死ぬも彼らの自己責任……彼らの死を嘆く者も居るというのにか……それこそ知ったことか……そもそもシスターと組む必要があるのか……1人でやるより2人でやる方が効率がいいのは当然……俺はコイツを信用出来ない、裏切る可能性が……ここまで種明かししている以上、どうやって？……それは……そのリスクを負う以上の価値が彼女（本選経験者）には……いや、本選を経験しているからこそ油断は出来ない……。

受けるべきか、断るべきか。2択の間で考えに揺れるイナギ。その前に悪魔のような微笑を浮かべる生物が1つ。

「あのさ……むさ苦しいの、嫌なんでしょう？ それに日が経つと受験生が休憩スペースに集まってくるかもしれないわね。——こいつら追い出せば、この広い機内を、自由に使えるわよ？」

——どうして俺の気持ちを？　今更な疑問だったが、そんな物は直ぐに消えた。

その一言で思考の天秤は片方に落ち、その上錘の重量で天秤自体が崩壊し、その残骸を蹴つ飛ばしゴミ箱に放り入れ雑巾持つてきて水拭き乾拭き丁寧な塵芥すら拭き取り綺麗になつた床を眺め2度頷いて手を払い満足げな顔でその場を後にして――

——結局、イナギはシスターの提案を受託する事にした。

最後の言葉から決定までの間は、半秒のさらに半分よりも短かったという。

第六話 『降船準備』（前書き）

閲覧くださり、本当にありがとうございます！！！
現在のPV8513、ユニーク1160

花粉症辛いです。

アレルギーはなかったのになあ……

第六話 『降船準備』

とある噂が機内に流れ始めたのは、飛行船が離陸してから2日目の正午頃であつた。

先日 to 突如として行われたクガジ機長の放送。その中で繰り返して強調された「エルベガ方面行き」「順調に行けば」という言葉。

果たしてこの機はエルベガに着くのだろうか？ 機内にいる受験生の殆どが否応なしに不安を掻きたてられていたため、その噂は空翔け獲物を仕留める鷹の様に受験生の間を駆け抜ける。

「この機はエルベガには到着しない。ブラフだ」

「夜中の数時間だけ飛行場に留まるらしい」

「もう数人が昨晚の内に降りたようだ」

「早く降りないと失格になるとか」

受験生から受験生へと。様々な尾ひれを付けながら。伝言ゲームの如く伝わったそれらは、同日の夕方には既に知らぬ者がいない程浸透していた。

果たしてどの選択が正解なのか。降りるべきか降りざるべきか。選択の狭間で心を囚われ、疑心暗鬼に思考を奪われ、結論が二転三転と変化する。

そんな状況下。防音加工が施されたとある部屋。耳当たりの良い笑い声が、あまり聞きたくない中身を伴って室内に散っては反射しを繰り返している中で。

「くふふふ、ふっふっふ、あーっはっはっはっは！ もう上手く行き過ぎておかしいったりやありゃしない！！ 欠伸どころか変な物まで出そうだわ、もうあいつら馬鹿すぎよ！！ ねえ、そう思わない？ そう思わない？」

「確かに想像以上に踊ってくれている受験生諸君には愉快さを通り越して同情や憐憫の情を禁じることが出来ないのは事実だが、それはそれとして。……俺の眼の前でその高級そうな酒をちびちびやるのがそんなに楽しいか？」

「ええ、もう最高！」

「……ちよつとは氣遣つたりしないのか？」

「微塵も無いわね！！」

——なるほど、間違いなくこいつ（ブルジョア）は俺の敵だな。
イナギは恨みとか決意とかを新たにしているのであった。

かささぎの梯

第六話 『降船準備』

そんなこんなで明けて翌日。お天道様の陽射しが和らぎ、昼寝に最適な環境にある離陸3日目の昼下がり。

こんな天気の良い日に部屋に閉じこもっての話し合いなんか御免被ると主張したイナギが、代替の場所として提案した機内食堂である。

「ん、確かにココなら問題なく話せるわね。静かで近くに人いないし」

「そして漏れなくアイスコーヒーがついてくる。何より重要なポイントだな」

「……や、まあ私も嫌いじゃないんだからいいんだけど。それにしてもここホント気持ちいいわね。毛布持ってきて昼寝したいわ」

ポカポカとした温もりに誘われて知らず知らずの内に落ちそうになる頭。容赦なく襲い掛かってくる午睡への誘惑と懸命に闘いながら、ここで2人は今後の方針について話し合っているのだった。ちなみに他の受験生がいないのは指定された昼食時間が既に過ぎているからで、本来機内食堂は食事時以外の使用は厳禁である。にも拘らずこの2人に注意の声が掛からないのは、いかに常日頃の行いが重要であるかの現れであるといえよう。……例の女性スタッフはイナギが来てから謎の腹痛で休憩中である。南無。

「さつてと。ホント予想通りになったわね。上手く行き過ぎて逆に不安になってきたわ」

「ま、予選だしこんなもんなんだろ。ルーキーだから詳しく知らないけどな」

「んー、私も予選は初参加以来だからね。あの時はいっぱいいだったから……」

あん時はどうだったっけ……なんて呟いているシスターを細目で観察しながら、イナギはアイスコーヒーを軽くすすった。

ハンター試験は、大きく分けて予選と本選の2種類がある。そしてこの間に聳え立つ壁は想像以上に高く険しい。

その壁とは、ただ「本試験会場に辿り着く」事が出来るか否かのみ。一見簡単そうに思えるが、その実この過程で応募者の99.9パーセントは脱落する。

当然、その後に行われる本選の厳しさは予選の比ではない。小数点以下の競争を勝ち抜いた猛者がさらに篩にかけられていき、開始時に数百名だった受験者は次々と失格になる。予選が稚戯に思えるそれらの中で、運が良くない者は須らく命を落とす。

そんな茨の道を複数潜り抜けたほんの一握りの人間のみが手に入られる、世界最高のマスターカード。それがハンターライセンス

なのである。

そんな難試験だが、彼女は初参加以来予選には参加していないと聞いた。それはつまり所、前回を除いた全ての試験において、彼女が翌年の試験会場無条件招待権を得ていたことになる。

これを手に入れるための条件は一つ。定められた基準以上の試験を潜り抜ける事。

言うは易く、行なうは難し。その実績と経験は馬鹿に出来ない。

「けど、思い返すとあれから4年しか経ってないのね……あ、そこから年探ろうとしたら潰すわよ？」

「残念ながら興味ないな、他を当たってくれ」

——3年連続で本選無条件、か。直接的な戦闘はともかく、搦め手じゃあ足を掬われるかもしれない。

手の中に在る細長いグラス。その中でカラコロと陽気な音を立てる氷を手慰みながら、イナギは密かに警戒を強める。

そんなイナギの思いを知ってか知らずか、シスターは聖女の様な笑顔を浮かべて話を変えた。

「まあ、取りあえず受験生に危機感を植えつけるのには成功したわ。これで奴らは情報の真偽確認に躍起になって、余計にドツボに嵌ってく。このまま見てる分には面白いんだけど、そういう訳にもいかないからね」

「ああ。この迷いを降船の決断に持ってかなきゃならないからな。まったく面倒なこって」

「仕方がないじゃない。このまま鬱憤が溜まって本気でハイジャックされたら全員失格なんだから。逃げ道作つとかないと暴発するのは目に見えてるんだし」

「巻き込まれるのは勘弁だしな」

「ええ、その通りね。全員に降りてもらわないと」

その言葉に、イナギは目を細めて窓の外に広がる大きな層雲を眺める。そのまま言葉の続きを待ってみるも、返ってくるのは穏やかなBGMの旋律だけだ。

——ぶつちやけ降船の具体策、イナギはまったく思いついていなかった。

「ああ、その通りだな」
「ええ、その通りね」

だがそれを認めるのも癪なので、深く頷いて続きを促す。
しかし答えはオウム返し。そして彼をジッと見つめるシスター。

「降りて、もらわないとな」
「ええ、その通りね」

再び暗にその具体策を尋ねるも、やはり彼女は鏡に徹するようで。

「……降りて」
「ええ、その通り」
「……」
「本当に、その通りよね」

——つまり、俺が聞くまで答える気はない、と。
意図的に固定していた視線を元に戻す。イナギの目の前にあるのは、思わずぶつ飛ばしたくなるくらいイイ笑顔だった。

「……で、この後はどうする予定なんだ？」
「まったく、始めから素直に聞けばいいのに。教えてもらえるかは

別にして、聞くだけならタダだからね。冗談じゃなく、ここじゃあ一生の恥になっちゃうわよ」

ムスツとした面持ちで貝になりつつも、イナギはその忠告を素直に受け取っておくことにした。

出発前夜、ビスケに言われた事を思いだしたからだ。慢心、油断は人の身を蝕む猛毒であり、それに巢食われた人は遠からず破滅する。それは念使いだろうとなかろうと、関係のないことなのだ。

「で、予定の前に確認するけど。受験候補生助けるの、手伝ってくれるって事でいいのよね？」

「……まあ、やっぱり見捨てるのも寝覚めが悪いかな、と」
「そうよね。見殺しにするのは可哀想だしね」

——このまま乗ってたら、多分ほとんど死んじやうし。

呟いたのは、昨日聞いたのと同じ科臼で。異なるのは、込める想いを素直に表出したこと。

そう言った彼女の顔には、周囲に広がる大空のように澄んだ真摯さが宿っていた。

「このまま放っておいてもエルベガには着くけど、そこは滑走路の上なんかじゃない。エルベガ方面……その外れも外れ、砂漠のど真ん中にご招待。アンタの予想が当たってれば、の話だろ？」

「予想？ 確信よこれは。予選といえど物見遊山で来れるほど甘い所じゃないのよここは。そして降船時に与えられるのは個人で持てる程度の水と食料……死ねって言われてるようなもんじゃない」

「奴らのモチベーションなら、降船しないって選択肢はないだろうしな」

そして、降りたら次第に無くなっていく水と食料、減っていく体

力と思考力。物資の奪い合いになるのは目に見えてるし、奪って尚エルベガに辿り着ける可能性は絶対じゃない。そうすれば後は全員砂漠の砂だ。

「だから、救える命は救つときたいのよ。砂漠まで行っちゃったら流石にその余裕はなくなるだろうし」

「そうだな、一緒にミイラはご免被る」

「私だってそんなの嫌よ」

意見の一致を見たところで、イナギはふうと一息ついた。アイスコーヒーは一服の清涼剤。今のうちにコーヒー分を補給である。砂漠じゃ飲めないし。

「それで戻すが、次は何をするつもりなんだ？」

「んー、実を言うと今すぐにつてのは特に無いのよね。取りあえずは飛行船側の行動待ちよ」

「要するに待機だな。で、行動つて具体的に何だ？」

「そりゃ一つしかないじゃない。受験生に降船の意思を植え付けたら、待つのはそれが可能となる時」

「……まさか着陸？ エルベガに着くまでにほかの空港に降りるつてのか？」

「そりゃ降りるわよ。というか降りないといつまでたってもエルベガに到着できないわ」

何当たり前のこと言つてんのよ？ なんて風に言われたイナギだが、少しは大目に見て欲しい。何故つてこちらら初参加も初参加。まったくのルーキーである。

「……物資補給の為か？」

「ノン。ま、半分正解つて所かしら。運行側はそれを理由として着

陸するでしょうからね」

ちなみに。普通に運行すれば、この旅程は補給など必要ない距離の筈である。

「——まったく。原点忘れてどうするのよ。そこに航空会社の立場を絡めて見れば一目瞭然じゃない」

言われて、イナギはようやく彼女の言いたいことを理解した。

原点とは、つまり試験官である機長の目的とは、ハンター試験受験生の選別に他ならず。そして仮にこのまま砂漠に受験生を降ろした場合、そのほぼ全員が亡くなる事は想像に難くない。

「成るほど。試験官……いや、この機を運行している航空会社からすれば、殺人幫助の汚名は被りたくない、か」

「そうよ。いかにハンター協会の依頼で運行しているとはいえ、悪評は少ない方がいいわ。だから積極的に関与していない事を示すため、降船の道を閉ざす訳には行かないし、またその回数は多ければ多い方が好ましいのよ」

「他で降りることは出来た。が、奴らは制止を聞かずに自分から砂漠に降りてった。そんな言い分を用意したいんだな」

「That's right!（その通り!）」

シスターは、満足げに指を鳴らして頷いた。

「だからこの飛行船は絶対にどっかの空港に着陸するわ。理由は、さっき言った通り物資補給の為。回数は、そうね、少なくとも3回はあるかしら」

「そして、この旅程で試験官が試そうとしてるのは……」

「精神的不安に打ち勝って、最後まで初志を貫徹出来るかどうかで

しょうね。自分の選択への責任能力の有無。そしてその責任を果たすことが出来るか否か。その見極めなのよ」

初志貫徹。即ち、5機ある内でこの飛行船に乗ったという自身の選択を信じ、貫く事の可否。

そして、その責任を果たす。自身の選択の結果到着した砂漠という苛酷な環境を潜り抜け、エルベガまで辿り付く事の可否。

この試練で試されているのは、その2つであった。

「で、着陸したら寝ている連中を叩き起こして、そうね、とりあえず降りる現場を実際に見せましょう」

事前にばら撒いた噂の中に「飛行船が夜中に飛行場に降り立っている」は含まれているため、実際に降りるのを見れば他の噂……「エルベガには着かない」「降りないと失格になる」などの信憑性も上がるという事らしい。

「その後はひたすら情報操作よ」

「飛行船に留まる事への不安感をひたすら煽って全員降ろす、と」

「実際に人数が減れば厭船気分はどんどん加速してくから、始めの数十人をどう降ろすかが難所といえば難所かしらね」

ま、この分で行けば特に問題がなさそうな気がするけど。そんなシスターの意見にイナギは静かに首を縦に振る。

「だったら俺はそれまで本でも読むとするか」

「うげっ、こんなとこまで来て読書すんの？ 物好きねえ」

「人の趣味に口出さない。何だ、本嫌いなのか？」

「朝夕のお勤めだけでお腹一杯よ。何が面白いんだかさっぱり分かんないわ」

「さよけ。ま、時間になつたら声かけてくれ」

「……ちよつと待ちなさいよ、アンタどこに行くつもりなのかしら？」

おもむろに空色のダイニングチェアから立ち上がるイナギに、シスターはヒシヒシと嫌な予感が。

既に悪寒一步手前のそれが容赦なく精神を削る。僅かな希望を求めてジト目をしてみるも、入ってきたのはしたり顔。

「俺が、あんなに静かで心地よい場所を手放すとても？」

防音処理されてるため雑音は入らず、空調も完備。さらには部屋付の冷蔵庫にはコーヒーも入っていると三点揃い。

馬に乗り換えた上で牛は美味しく頂くイナギである。彼女の客室に行かない訳がなかった。

「ぶざけんじゃにやいわよ！ 1人で静かに空を旅したくてわざわざ高い金払ったのよ！」

「なら大丈夫だな。うるさくしないから」

「1人でつつてんだろーがあー！！」

ギヤーギヤー喚くシスターと、るるんしながら歩いていくイナギ。始めは上の空の返事をしていたが、その後完全なシカトに入る。途中ついに立ち止まったかと思えば、シスターに部屋の力ギを求めただけだった。

結局この騒がしさは、彼女が精根尽き果て諦めるまで終わらないのであった。

▲

「もーいや……もう絶対に部屋に入れてやるもんかこんちくしょー……」

「まあまあ、ため息つくと幸せ逃がすぞこのブルジョアめ」

「うつさいわよ！ 誰のせいだと思ってるのよ！！」

「静かにしろってブルジョア。TPO考えないとダメだぞ人として」

「何か説教されてるし！？」

「まったく、これだからブルジョアは」

「だったらアンタは人非人——ってなんでそこはかたなく嬉しそうなのよ！？」

あれ、私真面目に人選ミスった？ 本格的に悩み始めたシスターに、イナギは気持ちよくサムズアップした。

「我々にとっては褒め言葉です」

「コイツ……腐ってやがる」

こんな輩と手を組む絶望感に身を委ねつつも、シスターは何とか氣力を奮い立たせた。

何故なら建設的な話し合いが出来るだけマシである。今まで真面目な話は悉くからかわれていた。

シスターの目が虚ろになったのも一度や二度ではない。イナギが部屋にいるから夢の世界に逃げることもできなかった。南無。

——そんなこんなで。再び舞い戻ってきて夜の食堂である。

時刻は午後8時の10分前。夕食支給時間内ギリギリのため、付近に人は数えるほどしかいなかった。

そんな食堂の炊事場付近に陣取った2人は、心持小声で話し合いながら夕食をつつく。

今晚のメニューは焼きたてのバゲット、エビのオーロラソース和え、粒貝のクラムチャウダー、グリーンサラダ。そこにバターやジャムにソフトドリンクがつく。乗客の質を考えてか、アルコールは

提供していなかった。

「本当によかったの？　ここまでやってもらって」

「気にするない。あのホールスタッフとは“友だち”だからさ」

語尾に「ッ」が付きそうな具合に親指を立てるイナギ。もしその“友だち”がこの言葉を聞いたら、イナギの顔に躊躇なく嘔吐するだろう。

——そう。またここで犠牲となったのは例によって例の彼女であった。

繰り返すが、本来この食堂はセルフサービスである。当然料理にしたって既に作られたものを順に取っていく形となり、こんな遅くに来ては「出来立てのバケット」などが存在するはずもなかった。しかし食に関しては欠片も妥協しないイナギである。野生の勘で即座に離脱しようとしたホールスタッフ（犠牲者）を軽く阻止し、胃痛に呻く彼女へ容赦なくお願いしたのであった。

そんな彼女は現在もイナギに頼まれてアイスコーヒーを作っている最中である。その後ろ姿から駄々漏れるドドメ色のオーラを見て、シスターは深く同情した。今なら彼女とイナギへの恨みだけで一晩語り明かせる自信がある。今すぐ肩を叩いて深く頷いてあげたかった。

が、彼女はそれをしない。今はそれよりもイナギと話し合わなければならぬことがあるからであり、何より矛先が自分に来ると困るからである。

ホールスタッフから見たら同じ穴のムジナであった。

「……ならもう良いわ。それじゃあこの後だけ」

「今日降りるかどうかは分かんないんだろ？　だったらどっちか片方が見張りでいいんじゃないか？」

「一応聞くけど、どこで見張ってどこで寝るつもり？」

「着いたら起こさなきゃなんないんだ、離れる訳にもいかないだろ。よって当然お前の客室——」

イナギのセリフを聞き、シスターは諦観の極みにあった。今まで見た彼の行動から分かつていた返事ではあるのだが、それでもやっぱり精神がガリガリと削れる音がする。しかも今回に限って言えば彼の言い分はとも正しく、拒否する訳にもいかなかった。

が、理性は納得しても感情は違う訳で。部屋にいられたら見張りじゃなくても私寝られないじゃにゃいのよ！ と叫ぼうとするのを、イナギの続きが遮った。

「——と言いたところだが。今回は俺が休憩スペースで見張りをするさ」

「……え？」

イナギを見つめて絶句するシスター。頭の中で彼のセリフが反芻するが、自分の耳が信じられない。首を捻って耳を抑えてみてもそれは変わらず、次いで頬を思いつきり抓ってみたりした。痛い。

「……え、何これドッキリ？」

そして、この反応である。

「ああ、また私を騙そうとしてるんでしょ。うん、そうに違いないわッ、騙されないわよ！！」

「いやいやいや、今回は嘘でも冗談でも何でもな」

「うっん、やっぱり白昼夢？ やーねえ私ってばおちゃめさん。夢は眠って見る物よ」

「……オイ」

「そっか、だったら屋気楼ね。砂漠近いし——ってここは飛行船の

中だったわね。落ち着くのを私、素数を数えるのを私！」

「……」

「——分かった、アンタ偽物ね！ 本物はどこにいるの！？」

「聞けよ人の話」

果たして俺はどれだけ極悪人に見られているのかと小一時間。彼は更なる人災（アラマ爺）を見て育っているのです、そこらへんの感覚は非常に鈍かった。

「とにかく、今回俺は本気だったの。それとも何だ、アレか？ やっぱ俺に部屋にいてほしいっていうなら俺はそれでも一向に」

「いやいや私もそれに賛成よ賛成！ もう全身全霊を込めて全力でイエスを返しちゃったりなかったり！！！」

どっちなんだよ。

そんなこんなで、シスターが落ち着くのに5分ほど経って。

「で、どうして一人で見張りをする気になったのかしら？」

ようやく建設的な話し合いが出来るレベルにまで回復したシスターに、イナギは肩をすばめて話し出した。

「いやな、実は俺最近までの数年間ひたすら修行をして過ごしてたんだが」

うん、まあそんなだけ身体能力高めりや何かしらやってると思ってたけど。そんな事を思いつつも、彼女は声にしないで続きを求め

る。

「で、その時の課題の一つにあったのがさ、眠りながら巨岩が繋がった紐を持つ奴」

より詳細に言うなら、その岩は直径3メートル強。滑車を利用してその岩を自分の頭上で固定し続け、しかも突然師匠がその紐を切ってくるのだという。

「……何そのトンデモ修行」

小石程度なら聞いたことがあるが、そのサイズは断じて人間がやるものではない。

「まあ、そういう訳で。俺は眠ってても何かあれば、即座に意識を覚醒出来ると」

「……た、確かにそれが本当なら見張りは任せちゃって大丈夫そうね」

その通り、とイナギは頷く。が、シスターのそれに対する反応が明らかに鈍い。よく見れば目のハイライトが消えかけていた。

「大丈夫だが、なんか疲れてないか？」

「そんなことないわよ……じゃあ私もう寝る……後よろしく」

「それは構わないが、何かあったら起こすからな」

「ええ、ゼーんぶ任せるわ……」

「——おい、相当足がフラフラしてるが」

「だいじょーぶよ、だって私はもうすぐ鳥になるから……」

「……そうか」

「うん、おやすみ……」

千鳥もかくやというよろめきを見せつつも何とかリカバーしながら、シスターはその場を去ろうとする。心労が溜りに溜まって、最後の常識ブロークンでやられてしまったらしい。

後に残ったのは、やっぱりビスケの修行の異常性が理解出来ずに首を捻るイナギだけであつた。



夜半過ぎ。

足元で通路を照らす複数の非常灯と、窓から入る無数の星光のみが光源である休憩スペース。その青く透き通つた空間の中で、イナギは閉じた瞼をゆつくりと開いた。

現在、その場に人は数える程しかない。それはつまり受験生の大半が割り当てられた部屋にいらつたという訳で。

思つたよりも帰属意識の強い面々がこの機には集まつたのか。そんな些末事を考えながら、彼は音を立てないようにして投げ出していた体をゆつくりと起こす。

違和感を感じて起きたものの、まだ意識には薄いベールがかつている。イコール身の危険性が薄いという事で、同時にイナギが待ち望んでいる事態が起こつたことを示していた。

「——つとに、まさかの初日でビンゴか。まったく運がいいのか悪いのか」

そう独り言ちつつ、右手で頭を無造作にかき上げる。思わずこぼれる欠伸を押し殺しながら、彼は静かに立ち上がった。

微かに揺れたソファに一抹の未練を感じながらも、イナギは足音を消してそこを後にする。何とはなしに設置されたフットライトを数えながら、廊下を抜けて階段を上る。

そうして、その正面にある307というプレートが張られたドア。他室と比べ高級感漂うソレを、彼は3度軽くノックした。

「おい、起きてるか。起きてなければ返事してくれ」

そのまま数十秒が経ち、しかし応えはない。さてどうしてくれようかとイナギが思案し始めた時、部屋の中から返ってくる気拔けたような声。

「……起きてなかったら、返事できる筈ないじゃない」

すぐに用意するから、ちょっとだけ待ってちょうだい。眠たげな声で続けられたそれに、イナギは「おおせのままに」と応じたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4429q/>

かささぎの梯

2011年2月27日19時25分発行